

万斛西遺跡
Mangokunishi Site

浜松市教育委員会

2016年3月

Hamamatsu Municipal Board of Education, March, 2016



例 言

- 1 本書は静岡県浜松市東区中郡町 980において実施した、万斛西遺跡（旧鈴木家屋敷跡）の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は公園整備事業に先立ち、旧鈴木家屋敷跡における地下の遺構埋没状況を確認するために実施した。現地発掘調査及び整理作業・報告書刊行作業は、浜松市（都市整備部公園課）の依頼を受けた浜松市教育委員会（浜松市民部文化財課が補助執行）が行った。
- 3 発掘調査にかかる面積と期間は以下の通りである。

調査面積	1次調査Ⅰ期	102 m ²	1次調査Ⅱ期	12 m ²	2次調査	113 m ²
調査期間	1次調査Ⅰ期	平成 25 年（2013 年）1 月 15 日～23 日			1次調査Ⅱ期	平成 25 年（2013 年）3 月 5 日
	2次調査	平成 26 年（2014 年）10 月 30 日～11 月 28 日				
- 4 現地調査は、井口智博（浜松市民部文化財課）が担当し、1 次調査を熊谷洋子・水島絵理・武田裕美・藤森紀子・川西啓喜（浜松市民部文化財課）が、2 次調査を鈴井けい子・武田裕美・小杉直孝（浜松市民部文化財課）が補佐した。
- 5 本書の執筆及び編集は井口が担当し、鈴井が補佐した。
- 6 調査にかかる諸記録及び出土遺物は、浜松市民部文化財課が保管している。

凡 例

- 1 現地調査における測量基準は、旧鈴木家屋敷跡の境界確定業務における基準点成果を用いた。基準点の座標は当該業務において設定した任意座標、標高は海拔高である。
- 2 土層・土器の色調は『標準土色図』（農林水産省農林水産技術会議局監修）に準拠した。
- 3 遺構の略記号は以下の通りとし、遺構番号は遺構種別ごとに連番を付した。
SD : 溝 SK : 土坑 SP : 小穴
- 4 遺物番号は、遺物の種別にかかわりなく、調査次ごとに連番を付した。
- 5 本書で扱う瀬戸美濃産陶器を中心とした中世から近世の施釉陶器の編年的位置づけについては、以下の文献を参考にした。

瀬戸美濃産陶器

愛知県史編さん委員会編 2007 『愛知県史 別編 窯業 2 中世・近世 瀬戸系』

常滑産陶器

愛知県史編さん委員会編 2012 『愛知県史 別編 窯業 3 中世・近世 常滑系』

目 次

例言・凡例

第1章 序論 1

- 1 調査に至る経緯 1
- 2 調査の方法と経過 2
- 3 遺跡をめぐる環境 3

第2章 調査成果 5

- 1 1次調査の成果 5
- 2 2次調査の成果 17

第3章 総括 27

出土遺物観察表 32

図版

第1章 序論

1 調査に至る経緯

万斛西遺跡は、浜松市東区中郡町の平野上に位置する遺跡である。遺跡の中心には、江戸時代に代々万斛村の庄屋を務めた鈴木氏の屋敷跡がある。遺跡は遠州鉄道遠州西ヶ崎駅の近傍にあり、周辺の宅地化が進んでいるが、旧鈴木家屋敷跡の敷地は、広大な屋敷林に囲まれた旧来の景観を保っている。屋敷の主である鈴木権右衛門家は、江戸時代に浜松藩主に直接拝謁が許された「独礼庄屋」の筆頭として知られる家柄である。現在の屋敷地は、約 14,000 m²の敷地に母屋や離れ、土蔵、納屋、弓道場などの建物が配置されている。

屋敷地は、当主が浜松を離れた後は無住の地となり荒廃が進んでいた。このような状況の中、土地所有者から地域の憩いの場として活用するため、旧鈴木家屋敷跡の敷地について寄付の申し出があり、2010 年 12 月に土地と建物が一括して浜松市に寄付された。

土地と建物の寄付を受けた浜松市では、都市整備部公園課を主管課とし、屋敷跡を公園として活用する計画を定め、公園整備に向けた検討材料を得るために各種調査を開始した。江戸時代末に書かれた家系図によれば、鈴木氏の初代良宗は応永 2 年（1395 年）没とされ、室町時代までその系譜を辿ることができる。屋敷跡の形状は、方形の区画を呈し、中世の居館を江戸時代に庄屋敷として利用している可能性が考えられた。公園整備事業に際して、屋敷跡の歴史的な情報を活用することも視野に入れることになり、屋敷跡の遺構の残存状況と構造を確認するための発掘調査を実施することになった。

調査は、浜松市（都市整備部公園課）からの依頼を受け、浜松市教育委員会（市民部文化財課が補助執行）が実施した。現地調査は、2013 年 1 月と 3 月に 1 次調査、2014 年 10 ~ 11 月に 2 次調査を実施した。調査面積の合計は 227 m²である。

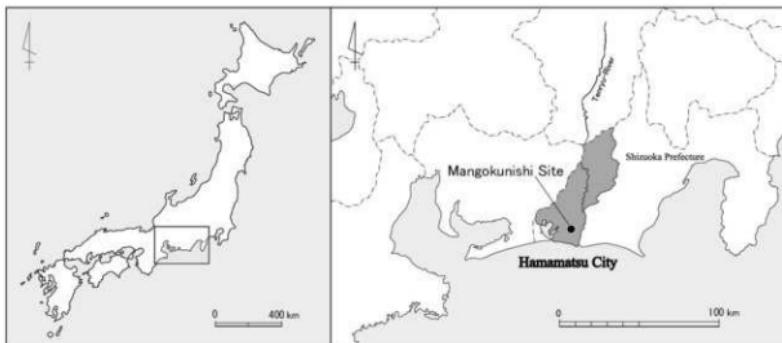


Fig.1 万斛西遺跡の位置

2 調査の方法と経過

調査対象 今回の調査では、旧鈴木家屋敷跡の範囲と遺構の残存状況の確認を主眼としており、現状の屋敷地の内部及び外周を中心に調査区を設定した。発掘調査は、2013年1月と3月に実施した調査を1次調査、2014年10～11月に実施した調査を2次調査とする。

測量基準の設定 調査を実施するにあたり、現場内に測量基準を設定した。測量基準は、浜松市都市整備部公園課発注の「中郡町境界確定測量（用地測量）業務」に基づく基準点成果を用いた。平面の基準は、この測量業務に基づく任意座標値を用い、高さの基準は標高値を用いた。

表土の除去 調査箇所の表層には、現代の整地土等が堆積していたため、重機（バックホー）を用いて表土除去作業を行った。バックホーのバケットには平爪を装着し、慎重に掘削を行った。

遺構の確認・精査 表土除去後、人力による包含層掘削と遺構検出を行った。包含層の掘削と遺構の検出には主に鋤廉とスコップを使用した。検出した遺構は、移植ごて竹べらなどを用いて慎重に掘り下げを行った。

図面の作成 遺構の平面図及び断面図、調査区壁面の土層図などは、設定した基準点を用いて作成した。また、一部の遺構では、遺物の出土状況に応じて出土状態図の作成も行った。

写真撮影 写真撮影は、1次調査についてはデジタルカメラを、2次調査については6×7判を主に用いた。また、重要な成果が得られた箇所については、部分的に大型カメラを用いて4×5判での撮影を行った。

整理作業 出土遺物及び記録の整理作業は、現地調査終了後、浜松市埋蔵文化財調査事務所において行った。



Fig.2 万斛西遺跡の調査箇所

3 遺跡をめぐる環境

(1) 地理的環境

万斛西遺跡は、浜松市東部地域の平野上に立地する。平野の東側、磐田市との市境には天竜川が遠州灘に向かって流下している。天竜川は長野県諏訪湖を源流とする全長 216 km の長大な河川である。流域の大部分は急峻な山岳地帯であり、浜松市内においても平野部を流れているのは、河口から 23 km 程度の距離に過ぎない。

万斛西遺跡の位置する積志地区の周辺は、天竜川が形成した沖積平野が広がっている。天竜川の流路は、近世以降の河川改修により堤防等が整備され、現在の範囲に固定されたが、改修以前は氾濫増水を繰り返し、絶えず流路が変化してきた。平野部においては、度重なる川の氾濫により、流路が安定せず、網の目のように広範に支流が広がっていた。天竜川の支流に挟まれた場所には安定した微高地が点在しており、遺跡もこうした微高地上に立地が確認できる。

(2) 歴史的環境

縄文時代 積志地区的平野上における縄文時代以前の遺跡は、現在のところ明確な事例は知らない。旧石器時代の遺構や遺物については、後世の土砂の堆積が著しく、その痕跡を見出すことも困難である。縄文時代についても「縄文海進」ののち、海退期を通じて徐々に沖積平野が形成されていったと考えられる。この時期については平野部において安定的な地盤が形成されておらず、生活の場の中心は三方原台地上にあったと考えられる。

弥生時代 弥生時代には、天竜川平野において安定した地盤が形成され、平野上における遺跡の数も増加する。しかしながら、万斛西遺跡の立地する積志地区や、東側に隣接する笠井地区の平野上においては、弥生時代の遺構や遺物の検出例は極めて少ない。近年、笠井地区の社口遺跡で、弥生時代中期の遺物が出土した。遺物は厚い粘土堆積層の下から出土していることから、後世の天竜川の氾濫等により上層の堆積が進んだものと推定される。

古墳時代 古墳時代になると、積志地区や笠井地区の平野上においても各所で遺跡の存在が確認できるようになる。笠井地区の恒武町周辺では、古墳時代前期の集落が展開していたと考えられ、搬入品を含む多数の古式土師器が出土している。

中期以降になると、平野を見下ろすことのできる三方原台地の東縁に多数の古墳が築かれるようになり、後期には小規模な円墳を中心とした群集墳が形成される。古墳を築いた集団は、平野上に集落を構えていたと考えられる。積志地区的平野上におけるこの時期の遺跡としては西畠屋遺跡や東畠屋遺跡などが存在する。特に西畠屋遺跡では、河川祭祀に伴う 7 世紀から 8 世紀前半の土器が大量に出土しており、群集墳造営に関わった集団の祭祀場と考えられている。

古代 天竜川下流域の平野上には、律令体制下において敷智郡、長田郡、龜玉郡、石田（磐田）郡の各郡が置かれていた。このうち長田郡は和銅 2 年（709 年）に長上・長下の 2 郡に分割されている。各郡の境界は明確ではなく、積志地区が古代にいずれの郡域に属していたか明らかになっていない。

積志地区の平野上の古代の遺跡としては、前述の西畠屋遺跡のほか、東畠屋遺跡、橋爪遺跡が存在するが、具体的な集落跡の検出には至っていない。

中世 天竜川東岸の平野上には、律令体制の形骸化とともに複数の荘園が形成された。特に浜松市内においては、伊勢神宮の荘園である御厨や美薗が多く認められる。中世の積志地区は古文書の記述などから、美薗御厨の範囲内に含まれていたと考えられる。

積志地区の平野部における中世の遺跡としては、西畠屋遺跡、東畠屋遺跡、万斛遺跡、橋爪遺跡、上大瀬遺跡などが存在する。発掘調査の事例に乏しい遺跡が多く、中世集落の実態については不明な点が多いが、万斛遺跡においては居館跡の存在が想定されている。居館跡は中世土豪の沢木氏の居館と考えられ、範囲内から鎌倉時代の山茶碗などが多数採集されている。また、上大瀬遺跡の範囲内においても居館跡と推定される箇所があり、平野内の交通上の拠点などに在地有力者層による居館の構築が進んだと考えられる。

近世 江戸時代における天竜川東岸の平野部は、大部分が浜松藩領となる。今回の調査地である万斛村の鈴木氏をはじめ、有玉下村の高林氏、伊場村の岡部氏など在地の有力者は「独礼庄屋」として藩主から厚遇を受けている。近世における発掘調査成果の蓄積は十分に進んでいるとは言えないが、区画溝の検出と地籍図などの検討から、集落内における近世から現代に至る区画の踏襲など一定の成果を得ている。



Fig.3 万斛西遺跡と周辺の遺跡

第2章 調査成果

1 1次調査の成果

(1) 概要

万解西遺跡は、江戸時代の庄屋屋敷である旧鈴木家屋敷跡の遺構残存状況の確認を主眼に調査を開始した。江戸時代末に作成された鈴木氏の家系図によれば、室町時代までその系譜を遡ることができる。鈴木氏が現在の万解地区に定住した時期は明確ではないが、中世の段階から地域の有力者として、屋敷を構えていたと推定される。現況の鈴木家屋敷の敷地は、東西約100m、南北約80mの逆台形状の敷地に屋敷門や母屋、離れ、土蔵、納屋、弓道場などの建物が残存している。屋敷

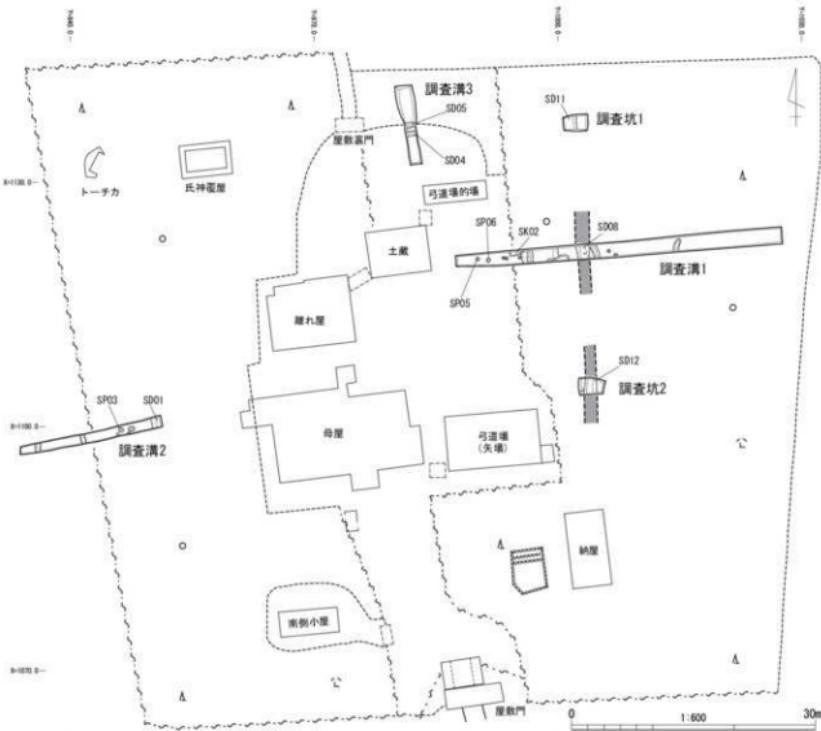


Fig.4 1次調査調査溝配置図

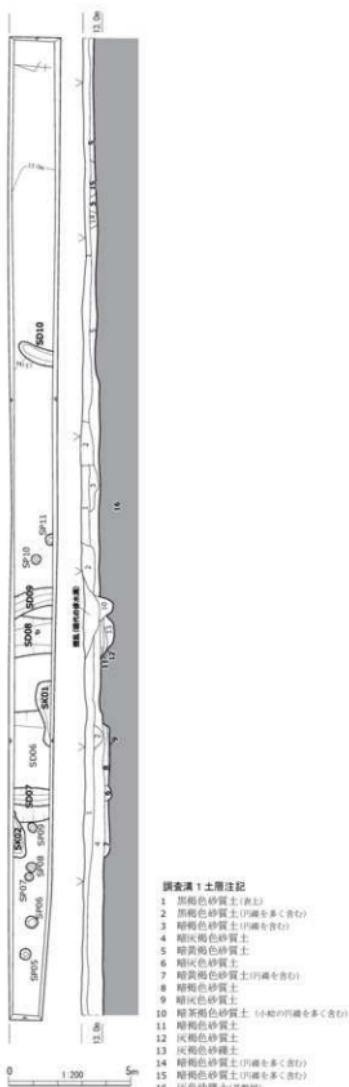


Fig.5 調査溝1実測図

の西側と南側は一段低い地形となっており、現状は水田として利用されている。

鈴木氏はその歴史的経緯から、中世において土豪的性格をもち、その屋敷も居館的な構造と規模であると推定された。このことから、屋敷の地下や外周の遺構を確認するため、屋敷地の東側と西側、北側に調査溝を設定した。また、より詳細な情報を得るために、後日、追加の調査坑を設定し、遺構の残存状況の把握に努めた。

(2) 調査溝1の遺構と遺物

土層堆積状況 調査溝1は、屋敷地の東側に設定した全長40m、幅2mの調査溝である。土蔵の東側から屋敷地の東端に向かって東西方向に掘削をした。

調査溝内の土層堆積状況は、東側と西側でやや異なっていた。東側は基盤層である灰色砂礫土の標高がやや高く、基盤層の上層に暗黄褐色砂質土が水平に堆積していた。遺物の含量は少なく、検出された遺構も少なかった。西側は、基盤層の標高が東側と比較してやや低く、上層に遺物を包含した暗灰褐色砂質土の堆積を確認した。

検出遺構 調査溝1からは2基の土坑、5条の溝、7基の小穴を検出した。遺構は、調査溝の西側に集中しており、東側の遺構密度は低かった。

溝はいずれも南北方向に掘削されている。調査溝西側で検出したSD06は幅4.1m、深さ20cmの浅く幅広の溝である。東側でSK01と、西側でSD07・SK02と重複していた。

調査溝の中央やや西寄りにあるSD08は、幅1.5m、深さ55cmの溝である。東側でSD09と重複しており、埋土の状況からSD08の方が先行して掘削されたと考えられる。埋土中からは山茶碗やかわらけ、瀬戸美濃産や志都呂産の陶器、貿易陶磁の染付皿などが出土した。溝の掘削時期は、出土した貿易陶磁の染付皿の時期から16世紀代に

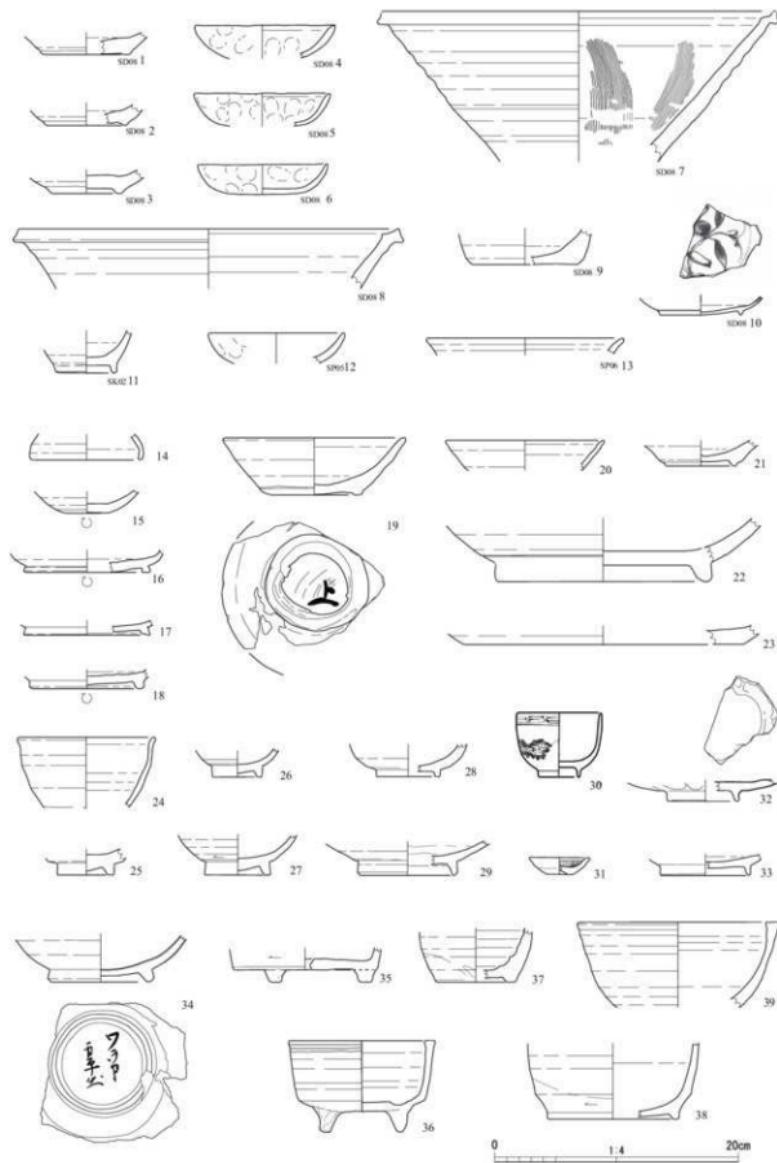


Fig.6 調査溝1出土遺物(1)

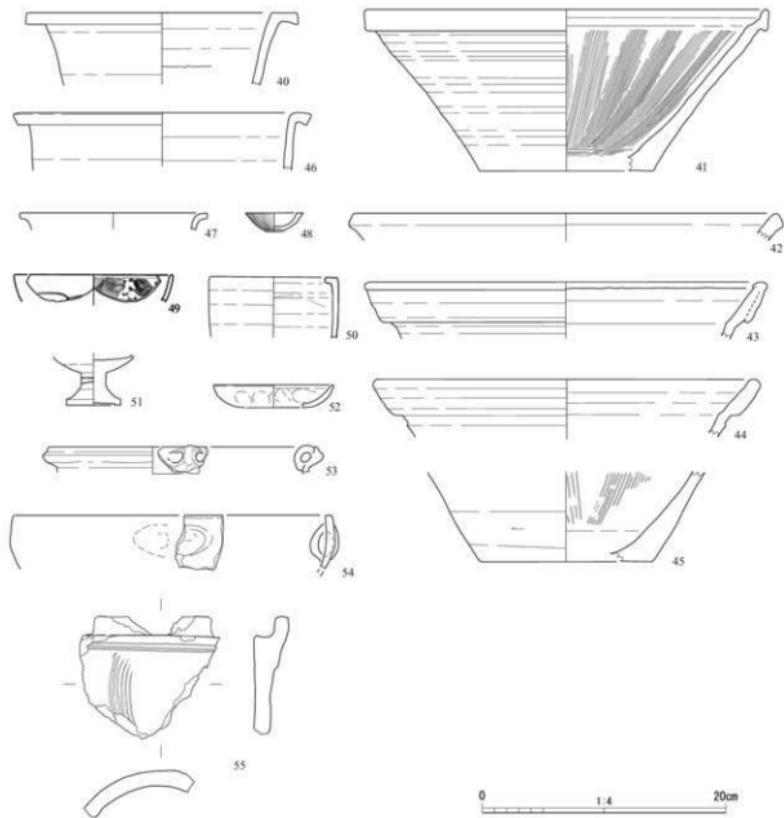


Fig.7 調査溝1出土遺物（2）

週ると考えられる。検出した溝の規模や掘削時期には差異が認められるが、掘削方向が共通していることから、いずれも屋敷内の区画のため掘られたと推定される。

小穴は調査溝の西側を中心に検出した。おおむね直径30cm～50cm程度の規模で、調査溝の西端では、直線的に並んだ状態で検出したが、調査範囲が狭いため、建物の柱穴になるか否かは明確にできなかった。小穴からは出土品が少ないので、帰属時期を明確にし難いが埋土の状況などから中世以降と推定される。

この他に遺構としての検出はできなかったが、土層断面の観察結果から、土中に円礫を集中的に集積した部分が認められた。礎石建物の根固めの痕跡と推定され、現在の屋敷地東側にも何らかの建物が存在したと考えられる。

出土遺物 調査溝1の出土遺物をFig.6と7に示した。1～10はSD08からの出土品である。1～3は鎌倉時代の山茶碗である。高台の低平化が進んでいることから、13世紀代のものと考えられる。4～6は非ロクロ成形のかわらけである。7と8は瀬戸美濃産の擂鉢である。7の内面は使用による磨減が著しい。形態的な特徴から7は登窯2小期、8は登窯3小期に位置づけられる。9は志戸呂産の瓶子の底部である。10は貿易陶磁の染付皿である。内面には染付で唐草文が施されており、特徴などから明朝の官窯で焼成されたものと考えられる。11はSK02から出土した肥前産の碗、12はSP05から出土した非ロクロ成形のかわらけ、13はSP06から出土した13世紀代の山茶碗である。

14～55は遺構外の出土品である。14は須恵器の壺蓋、15は須恵器の壺身の底部である。ともに7世紀代の遺物である。16～18はいずれも須恵器の有台壺身である。形態的な特徴から7世紀末から8世紀前半の遺物と考えられる。19～21は13世紀代の山茶碗である。19の底部には「上」の墨書が認められる。22は13世紀代の片口鉢の底部である。23は古瀬戸の折縁深皿の底部であり、古瀬戸中期I又はII段階に位置づけられる。

24は瀬戸美濃産の天目茶碗、25は瀬戸産の天目茶碗である。24は登窯2小期、25は登窯3小期に位置づけられる。26は美濃産の小碗、27は美濃産の尾呂茶碗である。いずれも登窯6又は7小期に位置づけられる。28は瀬戸美濃産の丸碗で登窯5～7小期の間に位置づけられる。29は瀬戸美濃産の折縁輪禿碗で登窯7小期に位置づけられる。30は幕末頃の瀬戸産の染付碗、31は近代の瀬戸産の紅皿である。32は美濃産の片口皿で登窯3小期又は4小期に位置づけられる。33は近世の絵軸皿の底部と考えられる。34は瀬戸産の片口で底部に墨書が認められる。登窯11小期に位置づけられる土器で、底部の墨書は「ラバ万平生」と考えられる。35は江戸時代後期の瀬戸美濃産の植木鉢、36は江戸時代の瀬戸美濃産の香炉である。37は美濃産の徳利、38は瀬戸産の半胴、39は美濃産の片口、40は瀬戸産の植木鉢である。38は登窯8小期又は9小期、その他は登窯8小期に位置づけられる。41～45は瀬戸美濃産の擂鉢である。口縁部の形状などから41は登窯4小期に、42は登窯7又は8小期に、43と44は登窯7小期に位置づけられる。46と47は江戸時代後期の志戸呂産の植木鉢の口縁部、48は肥前産の紅皿、49は肥前産の染付碗、50は肥前産の青磁香炉、51は肥前産の秉燭である。52は非ロクロ成形のかわらけ、53はく字内耳鍋の口縁、54は半球形内耳鍋の口縁である。55は丸瓦の破片である。2次的に焼成を受けており、全体が赤色化している。

(3) 調査溝2の遺構と遺物

土層堆積状況 調査溝2は、屋敷地の西側に設定した、全長18m、幅1mの調査溝である。母屋西側の現状の屋敷地境界に跨るように東西方向に掘削した。

調査溝内の土層堆積状況は、基盤層である灰色砂質土の直上は、暗灰褐色シルトの堆積となっており、東側と西側とともに共通していたが、暗灰褐色シルトの上層は、東側が遺物を包含した暗黄褐色砂質土が堆積していたのに対し、西側は黄褐色砂質土の堆積を確認した。この黄褐色砂質土の堆積は、近年整地のため施されたものと考えられる。

現状の屋敷地の境界付近には円礫を多く含む暗褐色砂質土の堆積を確認した。屋敷地の外周の法面強化のため施されたものと推定される。



Fig.8 調査溝2実測図

検出遺構 調査溝内を精査したところ、3条の溝と4基の小穴を検出した。遺構は、現状の屋敷地内の調査溝東側に集中して認められた。

SD01は、調査溝東端で検出した溝である。東側は調査区外であるため、全体の規模は不明確であるが、南北方向に掘削された溝と推定される。溝の深さは35cmほどであるが、東側は調査区外となっているため、幅は明確にできなかった。溝の埋土は上層が鉄分の発達した暗褐色シルト、下層が暗灰色砂質土と灰色砂質粘土である。埋土中からは須恵器と土師器が出土した。出土した須恵器は返り蓋と無台身、広口壺、土師器は大型の壺と小型の壺である。遺物の時期から7世紀後半

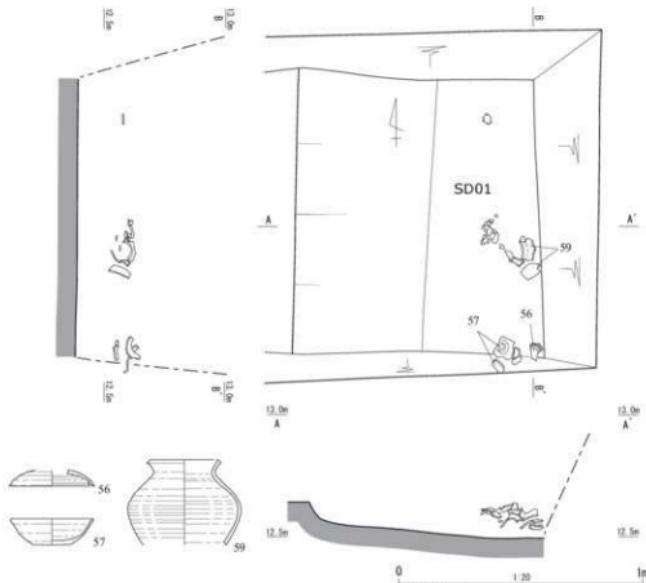


Fig. 9 SD01 実測図

代に掘削された遺構と推定される。検出した範囲が限られるため、溝の用途は明確ではないが、古代の集落に関わる遺構と推定される。

SD02 は、調査溝のほぼ中央で検出した幅 60 cm、深さ 30 cm の溝である。現状の屋敷の外周にはほぼ沿うように掘削されている。掘り込みは暗灰褐色シルトの上面から行われており、新しい時期の耕作等に伴う溝と推定される。SD03 は、調査溝の西側で検出した幅 70 cm、深さ 30 cm の溝である。SD02 と同様、掘り込みは暗灰褐色シルトの上面から行われており、新しい時期の耕作等による掘削と考えられる。

小穴は調査溝東側に集中した状態で検出した。SP01 は長軸 70 cm、短軸 50 cm の楕円形の小穴である。SP02 は直径 40 cm 程の小穴であるが、南側が調査区外となるため、全体形は不明である。SP03 は長軸 70 cm、短軸 50 cm の楕円形の小穴である。埋土中からは古瀬戸の瓶子片が出土した。SP04 は短軸 40 cm 程の小穴であるが、南側は調査区外であるため、全体形は不明である。検出した小穴の用途は、いずれも掘立柱建物の柱穴等の可能性が考えられるが、調査範囲が狭小であるため、明確にはできなかった。

出土遺物 調査溝 2 からの出土品を、Fig.10 に示した。56 ~ 61 は、SD01 からの出土品である。56 は須恵器の返り蓋、57 は須恵器の無台坏身、58 は須恵器の有台坏身である。59 は須恵器の広口壺、60 は土師器の甕、61 は土師器の小型甕である。いずれも 7 世紀後半に位置づけられる土器である。62 は SP03 から出土した古瀬戸の瓶子の肩部である。形態的な特徴から古瀬戸中期 I 又は II 段階に位置づけられる。

63 ~ 65 は遺構外の出土品である。63 は 7 世紀代の須恵器の横瓶である。64 は 13 世紀代の山茶碗底部である。65 は古瀬戸の鉢皿の口縁部である。形態的な特徴から、古瀬戸後期 II 段階に位置づけられる。

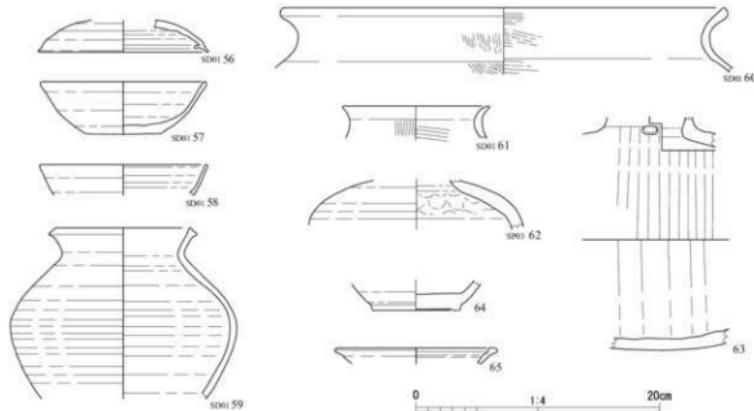


Fig.10 調査溝 2 出土遺物

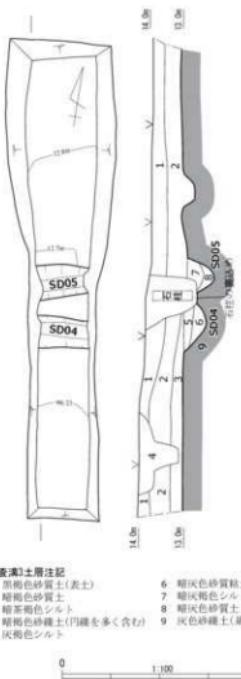


Fig.11 調査溝3実測図

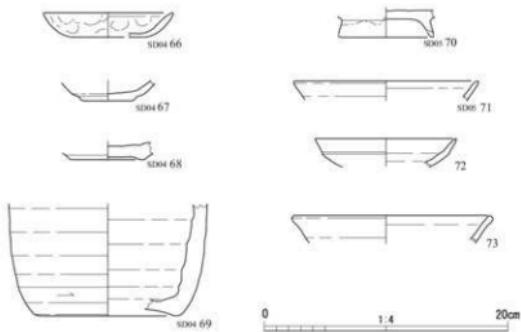


Fig.12 調査溝3出土遺物

(4) 調査溝3の遺構と遺物

土層堆積状況 調査溝3は、屋敷地北側に設定した全長9.2m、幅1.1mの調査溝である。弓道場的場の北側を南北方向に掘削をした。

調査溝内の土層堆積状況は、灰色砂質土の基盤層上に暗茶褐色シルトの堆積を確認した。この層は調査溝の南側のみで確認でき、北側では消失していた。暗茶褐色シルトの上層には暗褐色砂質土の堆積を、その上には表土である黒褐色砂質土を確認した。

検出遺構 調査溝3からは、2条の溝を検出した。いずれも東西方向に掘削された溝である。SD04は、幅60cm、深さ60cmの溝である。埋土中からかわらけ、山皿、山茶碗、初山産の徳利が出土した。SD05は、幅60cm、深さ50cmの溝である。埋土中から灰釉陶器の碗、山茶碗が出土した。SD04とSD05の間に上層には、石柱が連続して埋め込まれていた。設置時期は近代以降と考えられるが、下層の2条の溝と重複しており、近世以前に設定された区画が近代以降も踏襲されたものと推定される。

出土遺物 調査溝3からの出土品をFig.12に示した。66～69はSD04からの出土品である。66は非ロクロ成形のかわらけ、67は無高台の山皿、68は山茶碗の底部である。69は初山産の徳利である。瀬戸美濃編年の大窯3段階に併行する時期に位置づけられる。67と68は13世紀代の遺物であり、混入品と考えられ、溝の掘削年代は初山産の施釉陶器の示す16世紀後半代と推定される。

70と71はSD05からの出土品である。70は10世紀代の灰釉陶器の碗底部、71は13世紀代の山茶碗の口縁部である。

72と73は遺物包含層の出土品である。72は赤彩が施された古代の土師器の碗、73は13世紀代の山茶碗の口縁部である。

(5) 調査坑1の遺構と遺物

土層堆積状況 調査坑1は、I期調査で検出した区画溝の範囲を確認するため、屋敷地の北側に追加で設定した東西3m、南北2mの調査溝である。

土層堆積状況は、灰色砂礫土の基盤層の直上に暗黄褐色砂質土の堆積を確認した。最上層は黒褐色砂質土の表土である。

検出遺構 調査坑の西側で、深さ60cmほど掘り込みを確認した。西側が調査区外となるため、全体形は不明であるが、南北方向に掘削された溝状の遺構と考えられ、SD11とした。

埋土は上層が暗灰褐色や灰色のシルトであったのに対し、下層は砂や砂礫が主体であった。

SD11の埋土中からは須恵器や渥美産・常滑産の甕、瀬戸美濃産の擂鉢などが出土した。SD11はI期調査の調査溝1で検出したSD08と掘削方向がおおむね一致するが、埋土の特徴や断面形状がSD08と異なるため、同一の溝であるか否かは判断できなかった。

出土遺物 調査坑1からの出土遺物をFig.14に示した。いずれもSD11の埋土中から出土したものである。74は須恵器の壺底部、75は須恵器の陶白底部である。いずれも7世紀代の土器と考えられる。

76は渥美産甕の体部破片である。体部下半の破片と考えられ、表面にはタタキ調整が認められる。77は常滑産甕の口縁部である。口縁形状の特徴などから、常滑5～7期に位置づけられる。78は瀬戸美濃産の擂鉢である。口縁や底部は失われているが、色調などの特徴から登窯5～7小期に位置づけられる土器である。

SD11からの出土品は、7世紀代から18世紀前半代までの多様な時期が認められるが、古代や中世の遺物は混入品と考えられ、17世紀以降に掘削された溝と推定される。

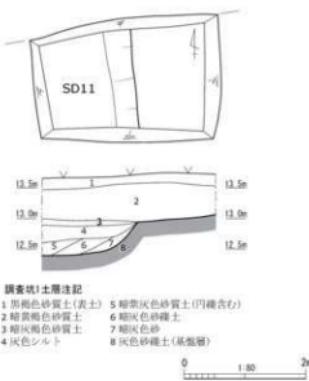


Fig.13 調査坑1 実測図

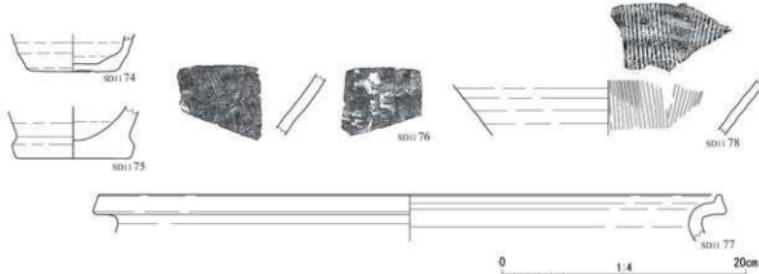


Fig.14 調査坑1 出土遺物

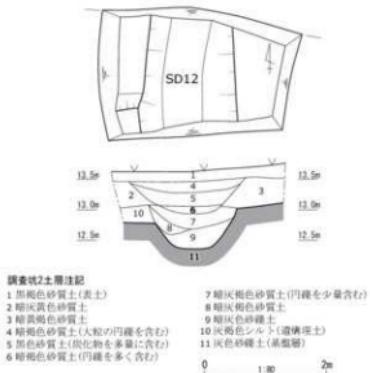


Fig.15 調査坑2実測図

砂質土であった。埋土中からは須恵器や瀬戸美濃産陶器、かわらけ、内耳鍋、羽付釜などの土器が出土した。SD12は掘削方向や規模、断面形状などの特徴がI期調査のSD08と酷似しており、同一の遺構である可能性が高い。

また、調査坑の北西側でSD12と重複した掘り込みを検出した。溝ないし土坑と考えられるが、大部分が調査区外であるため、明確にはできなかった。

出土遺物 調査坑2からの出土品をFig.16～18に示した。Fig.16はいずれもSD12からの出土品である。79は瀬戸美濃産の端反碗であり、形態的な特徴から登窯3小期または4小期に位置づけられる。80は瀬戸美濃産の擂鉢である。形態的な特徴から大窯2段階に位置づけられる。81と82

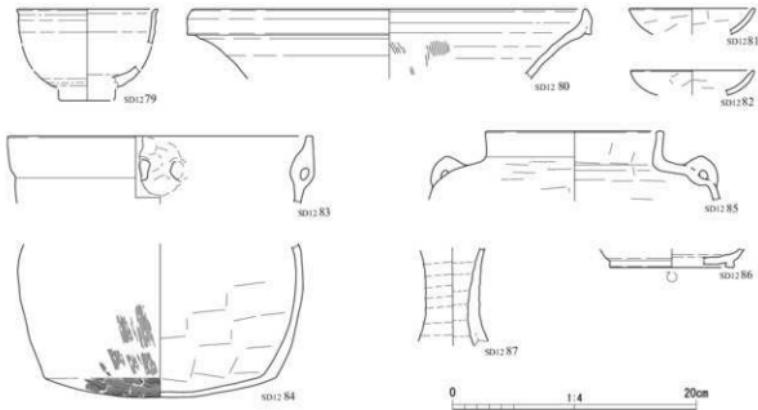


Fig.16 調査坑2出土遺物 (1)

(6) 調査坑2の遺構と遺物

土層堆積状況 調査坑2は、屋敷地東側の南寄りに設定した、東西3m、南北2mの調査坑である。調査坑1と同様、I期調査で検出した区画溝の範囲を確認するため、追加で設定した調査坑である。

土層堆積状況は、灰色砂礫土を基盤層とし、調査坑東側では暗黄褐色砂質土の堆積を、西側では暗灰黄色砂質土の堆積を確認した。最上層は黒褐色砂質土の表土である。

検出遺構 調査坑の中央から、南北方向に掘削された溝を検出し、SD12とした。溝の幅は1.4m、検出面からの深さは70cmである。

埋土は上層が暗灰褐色砂質土、下層が暗灰色

は非口クロ成形のかわらけ、83と84は内湾口縁の内耳鍋である。85は羽付釜の口縁部から肩部である。外面には円環状の外耳が認められる。86は須恵器の有台坪身、87は須恵器の長頸壺である。須恵器はSD12に伴う遺物ではなく、周辺から混入したものと考えられる。

Fig.17～18には遺構外の出土品を示した。88は13世紀代の山茶碗の底部である。89は筒型香炉である。登窯7小期に位置づけられる土器である。90は美濃産の丸碗、91は瀬戸産の丸碗、92は瀬戸美濃産の丸碗である。遺物の時期は90が登窯4小期、91が登窯6または7小期、92が登窯8小期に位置づけられる。93は瀬戸美濃産の尾呂茶碗、94～96は美濃産の尾呂茶碗である。いずれも登窯5～7小期に位置づけられる。97は美濃産の笠原碗で登窯3又は4小期、98は黄瀬戸の皿底部で登窯1又は2小期、99は瀬戸美濃産の片口で登窯5～7小期、100は美濃産の片口で登窯

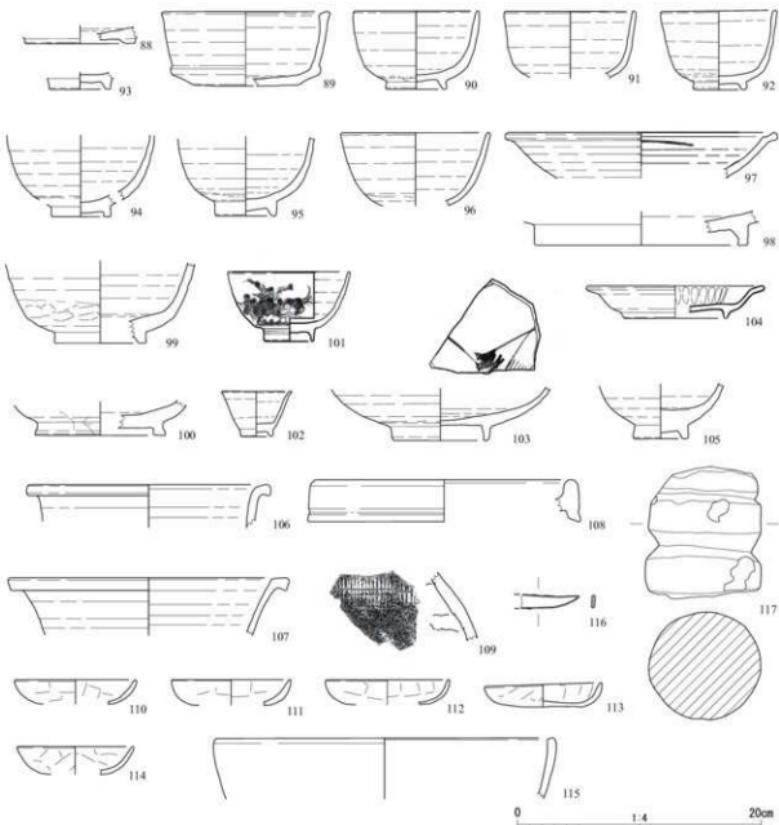


Fig.17 調査坑2出土遺物(2)

5又は6小期に位置づけられる。101は肥前産の染付碗、102は肥前産の小壺、103は肥前産の皿、104は肥前産と考えられる青磁皿である。105は唐津産の碗、106と107は志戸呂産の植木鉢である。108と109は常滑産の甕である。いずれも江戸時代の土器である。110～114は非ロクロ成形のかわらけ、115は半球形内耳鍋の口縁部である。116は用途不明の鉄製品片、117は砂岩製の石塔部材である。形状から宝篋印塔の相輪部分と考えられる。118～121は瀬戸美濃産ないし瀬戸産の擂鉢、

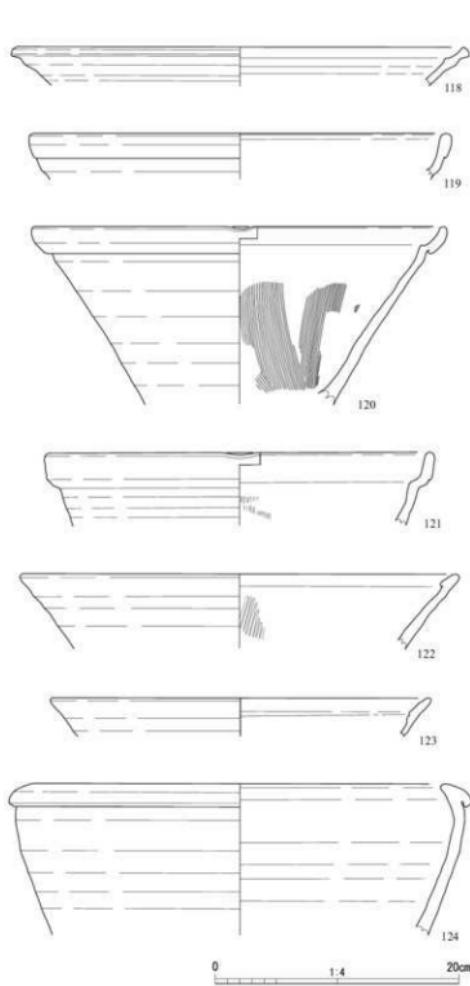


Fig.18 調査坑2出土遺物(3)

122と123は志戸呂産の擂鉢である。118は登窯2小期、119と120は登窯6小期、121は登窯7小期に位置づけられる。122は志戸呂古段階、123は江戸時代前半に位置づけられる。124は瀬戸美濃産の練鉢である。形態的な特徴から登窯10～11小期に位置づけられる。

(7) 小結

調査の結果、戦国時代から江戸時代にかけての遺構や遺物を検出し、旧鈴木家屋敷跡に関する考古学的な資料が得られた。特に屋敷地の東側で検出した、南北方向に掘削された溝は、江戸時代の家相図に描かれた区画溝の跡と考えられ、絵図に描かれた屋敷の構造物が地中に残存していることが明らかになった。

また、調査前には想定していなかった古墳時代から鎌倉時代の遺構や遺物が検出され、積志地区の平野部における新たな遺跡の発見に至った。

旧鈴木家屋敷跡の周辺は、周知の埋蔵文化財包蔵地ではなかったが、1次調査における成果と周辺の踏査成果を踏まえ、発掘調査後「万解西遺跡」として新たに埋蔵文化財包蔵地登録を行った。

2 2次調査の成果

(1) 概要

1次調査の結果、旧鈴木家屋敷跡の地下で近世の庄屋屋敷に関わる遺構の残存を確認するとともに、古墳時代から鎌倉時代に至る遺構と遺物の検出に至り、新規発見の埋蔵文化財包蔵地として登録を行った。

1次調査で検出した遺構のうち、屋敷地東側で確認した溝は、江戸時代の家相図に描かれた屋敷建物を取り囲む区画溝の可能性が高いと考えられた。また、1次調査では現状の屋敷地内部が調査の中心となり、屋敷地外周については充分な調査を実施できていなかった。特に屋敷地の外周に居館的な堀跡等がめぐらか否かについては明確にできていなかったため、追加調査により確認することになった。調査溝は屋敷地内の区画溝の想定地点と、現状の屋敷地北側の空地内や南側の水田内に設定した。

(2) 調査溝1の遺構と遺物

土層堆積状況 調査溝1は、現状の屋敷地北側に南北方向に掘削を行った全長26m、幅1.5mの調査溝である。屋敷裏門の外側に位置し、調査前は空地となっていた。

調査溝内の土層堆積状況は、南側と北側とで異なっていた。南側は基盤層である灰色砂礫土の標高が低く、基盤層上の薄い灰色砂の堆積の上にやや粘性のある暗灰色砂質土と灰褐色砂質土の堆積を確認した。北側は基盤層の標高が高く、基盤層上に掘り込まれた遺構を多く検出した。遺物包含層は暗黄褐色砂質土であるが、後世の耕作等による影響を受けており、部分的に土層が消失していた。

検出遺構 調査溝1からは1基の土坑、6条の溝、10基の小穴など複数の遺構を検出した。SK01は調査溝北端で検出した長軸40cmほどの土坑である。南側はSD05と重複しており、西側は調査区外となっているため全体形は不明であるが、埋土中から複数の山茶碗片が出土したことから、鎌倉時代の遺構と考えられる。

溝は調査溝北半を中心にして6条を検出した。いずれも掘削方向がほぼ一致しており、東西方向からやや北に振れた方向に掘削されている。SD01と02は調査溝のほぼ中央で検出した幅60cm程の溝である。2つの溝は30cm程の間隔を空けて同一方向に平行に掘削されており、同じ用途のため掘削されたと推定される。

SD03は、調査溝の中央北寄りで検出した幅1.4mの溝である。溝は異なる時期にやや位置を変えて掘られている。SD04は調査溝北寄りで検出した幅50cm、深さ20cmの溝である。溝は東西方向からやや北に振れた方向に掘削されており、SD01・02と掘削方向が一致することから同時期に同一の意図で掘削された可能性が高いと考えられる。SD05は調査溝北端付近で検出した幅1.5m、深さ10cmの浅い幅広の溝である。埋土中から山皿と山茶碗が出土したことから鎌倉時代に掘削された溝と考えられる。SD06は調査溝北端で検出した溝である。大半が調査区外となっているため、溝の規模は明確ではない。

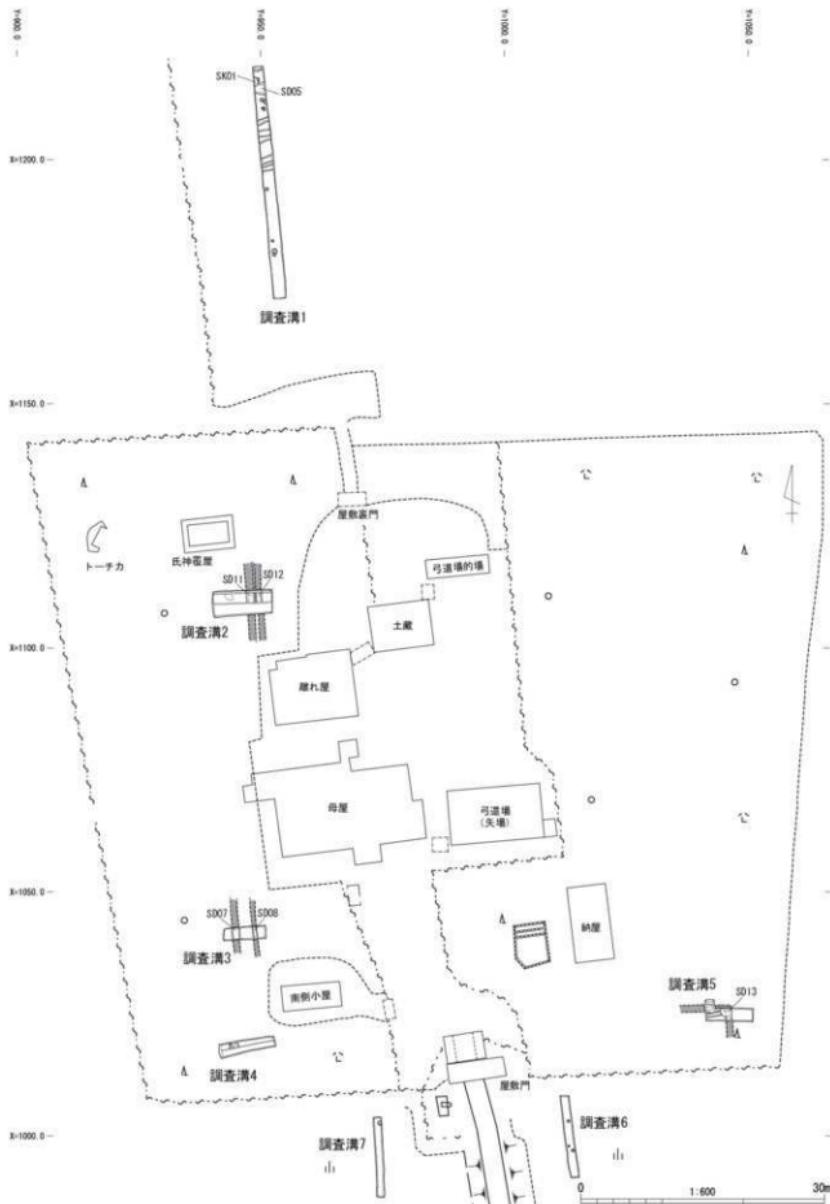


Fig.19 2次調査調査溝配置図

小穴は10基を検出したが、配置や規模に規則性は認められない。比較的直径が大きなものなど、一部は掘立柱建物の柱穴の可能性が考えられるが、調査範囲が狭小であるため、明確にはできなかった。

この他に遺構としての認識はしなかつたが、調査溝南端の基盤層が低く下がっている箇所から、古代から中世にかけての遺物が散発的に出土した。自然地形の落ち込みに周辺から遺物が入り込んだものと推定される。

出土遺物 調査溝1からの出土遺物をFig.21に示した。1～4が遺構内からの出土品、5～23が遺構外からの出土品である。

1と2はSK01から出土した山茶碗である。
3はSD05から出土した山皿の底部、4はSD05
から出土した山茶碗である。いずれも13世紀
代の遺物である。

5は土師器の甕の口縁部である。形状から6～7世紀代の甕の口縁と考えられる。6は9～10世紀代の灰釉陶器の碗の口縁部である。

7は山皿の底部、8と9は山茶碗の口縁部、10～14は山茶碗の底部である。10～14の底部にはいざれも糸切が認められ、このうち10と11には融着防止の稜線の痕跡が認められる。15は渥美産甕の胴部片、16は渥美産甕の底部である。17は貿易陶磁の青磁碗の口縁部である。内面には印刻で文様が描かれ、表面は灰オリーブ色の透明釉で覆われている。いざれも12～13世紀代の遺物である。

18はロクロ成形のかわらけの底部である。
19は卸皿の底部、20は京信系の碗底部、21は肥前産の染付碗、22は肥前産の小碗である。
かわらけは16世紀代、その他は17世紀以降
の遺物と考えられる。

23は常滑産甕の口縁部から肩部である。形態的な特徴から常滑10段階に位置づけられる。

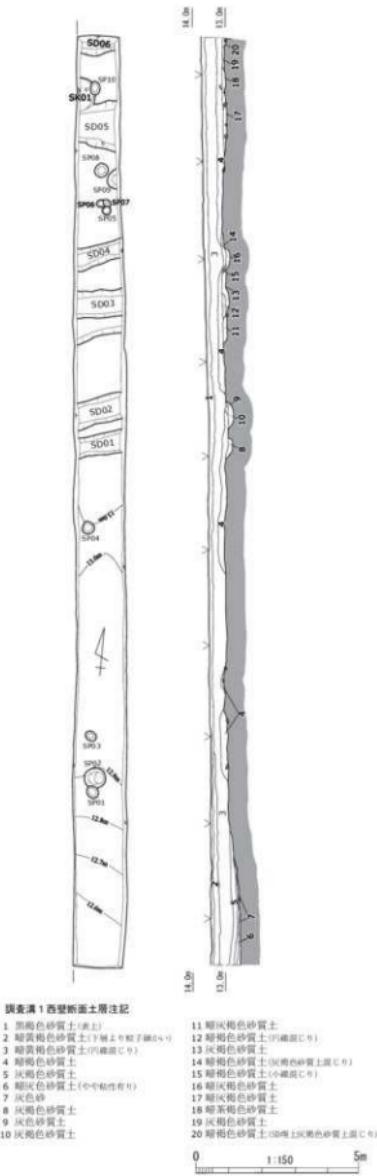


Fig.20 調査溝1実測図

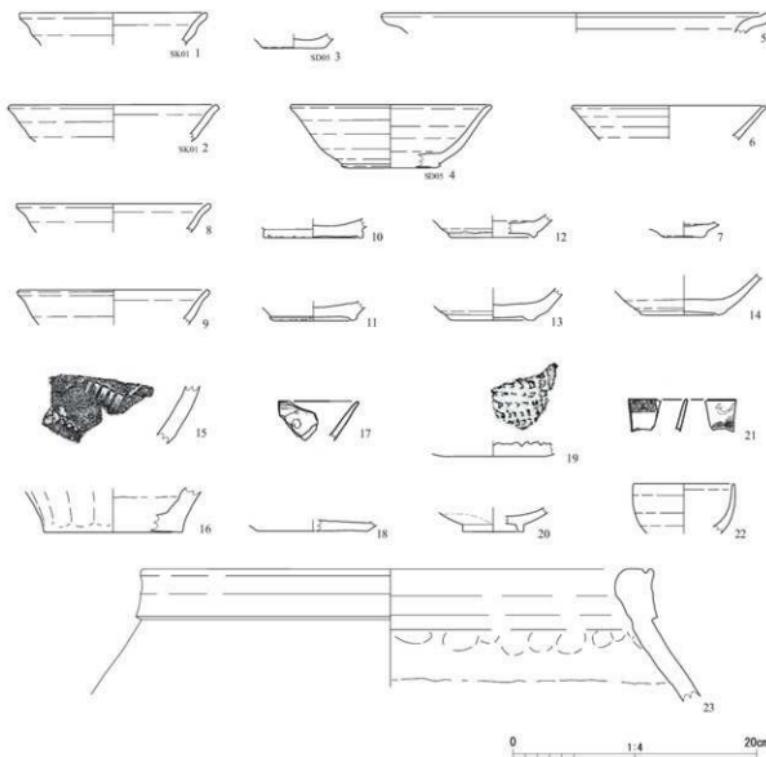


Fig.21 調査溝1出土遺物

(3) 調査溝2の遺構と遺物

土層堆積状況 調査溝2は、屋敷地北西の氏神覆屋前に東西方向に設定した全長7m、幅1.2mの調査溝である。

調査溝内の土層堆積状況は基盤層である灰色砂礫土の直上で、東側では暗灰色砂質土の堆積を、西側では暗褐色砂質土の堆積を確認した。西側の上層では、円窓を多数含む掘り込みが確認された。

検出遺構 調査溝2からは2条の溝を検出した。いずれも南北方向に掘削された溝である。SD11は幅1m、深さ40cmの溝である。埋土中からは大平鉢の破片が出土した。溝の掘り込みは暗黄褐色砂質土中から行われており、戦国時代以降の掘削と考えられる。SD12はSD11の東側に掘削された幅70cm、深さ30cmの溝である。掘削は表土層である黒褐色砂質土中から行われており、埋土中から近代以降の陶器片が出土した。

出土遺物 調査溝 2 の出土遺物を Fig.23 に示した。24 が SD11 の出土品であるほかは全て遺構外からの出土品である。

24 は SD11 から出土した大平鉢の口縁部である。13世紀代の遺物と考えられる。25 は 7~8世紀代の須恵器の壺類の底部である。26 は 10世紀代の灰釉陶器の碗の底部、27 と 28 は 13世紀代の山茶碗の底部である。29 は古瀬戸の四耳壺で、古瀬戸前期 III

~IV段階に位置づけられる。30 は貿易陶磁の青磁碗の口縁部である。特徴から 13世紀代の遺物と考えられる。

31 は貿易陶磁の染付小皿である。底部の高台内には「大明成化年製」の文字が認められる。明朝の官窯で焼成され、輸入された遺物と考えられる。32 は 15~16世紀代の常滑窯、33 は羽付釜の口縁部である。34 は肥前産の染付碗の口縁部、35 は肥前産の皿の底部である。36 は瀬戸産の播鉢である。形態的な特徴から登窯 2 小期に位置づけられる。

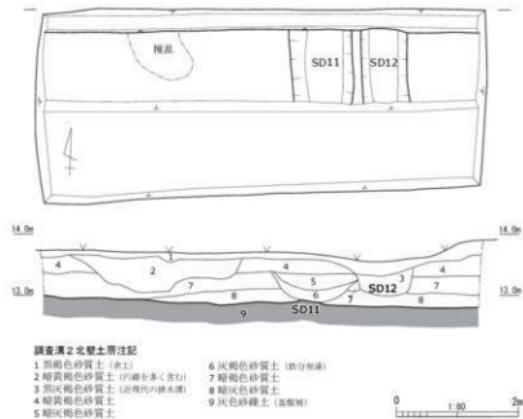


Fig.22 調査溝2実測図

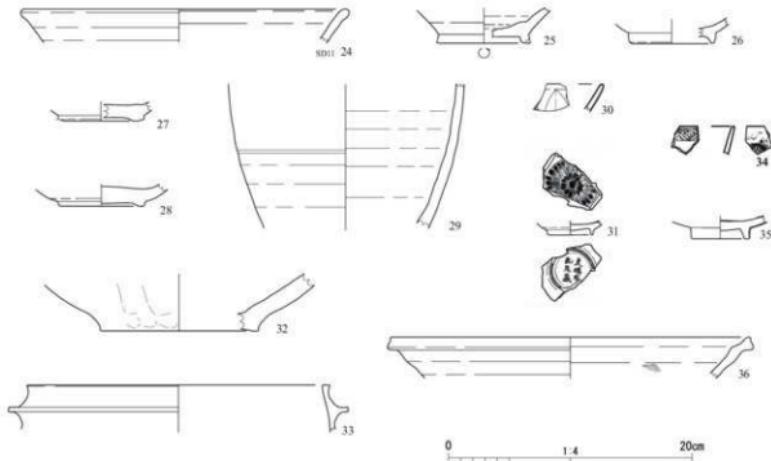


Fig.23 調査溝2出土遺物

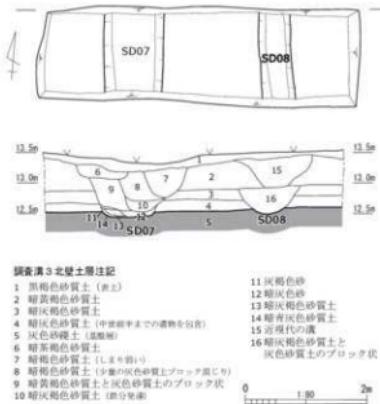


Fig.24 調査溝3実測図

さ 70 cm の溝である。埋土は複雑に入り組んでおり、複数回に渡って掘り直しが行われたと考えられる。埋土中からかわらけの小破片が出土しているが、溝は表土層から掘り込まれており、掘削年代は新しいと考えられる。SD08 は、調査溝東側で検出した幅 1 m、深さ 40 cm の溝である。上層には異なる時期に再掘削をした痕跡が認められた。この掘削は SD08 が完全に埋没した後に掘削されており、近代以降の掘削と考えられる。

出土遺物 調査溝3からの出土品を Fig.25に示した。いずれも遺構外からの出土品である。37は須恵器の坏身の口縁部である。8世紀代に位置づけられる遺物である。38は龍泉窯系の貿易陶磁の青磁碗である。39は羽付釜の口縁部である。



Fig.25 調査溝3出土遺物

(5) 調査溝4の遺構と遺物

土層堆積状況 調査溝4は、屋敷地の南西隅に設定した全長 6.4 m、幅 1.2 m の調査溝である。調査溝の周囲は屋敷林の樹木に囲まれた状態となっている。

調査溝内の土層堆積状況は、灰色砂礫土の基盤層の上層に暗灰色砂質土の堆積を確認した。この層は調査溝3や後述する調査溝5でも確認しており、屋敷地の南側一帯の下層に堆積している。鎌倉時代以前の遺物を微量含んでおり、屋敷地の造成以前の遺物包含層と考えられる。

検出遺構 調査溝4は、家相図に描かれた区画溝の南西側の末端付近を想定し検出を試みたが、溝の発見には至らなかった。

調査溝の北半分のみ基盤層まで掘り下げたところ、最下層の暗灰色砂質土中から掘り込まれた2条の溝を検出した。

SD09は調査溝西端で検出した深さ12cmの溝であ

る。西側が調査区外となるため、溝の幅は明確にできなかった。埋土中から土師器と山茶碗の破片が出土した。出土遺物から鎌倉時代の遺構と考えられる。SD10はSD09の東側で検出した幅80cm、深さ20cmの溝である。出土遺物が無く掘削時期を明確にしがたいが、埋土の状況などからSD09と同時期の遺構と推定される。

出土遺物 調査溝4からは須恵器や土師器、灰釉陶器、山茶碗が出土したが、図示できたのは包含層中から出土した40の常滑産の片口鉢のみであった。40は形態的な特徴から、常滑6a段階に位置づけられる。

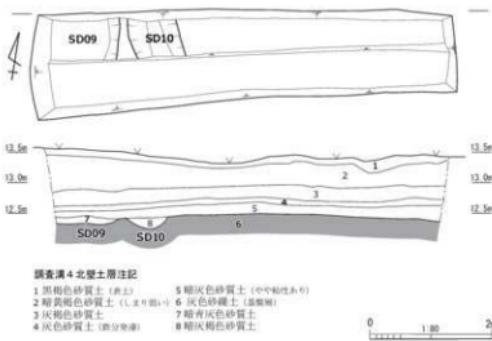


Fig.26 調査溝4実測図



Fig.27 調査溝4出土遺物

(6) 調査溝5の遺構と遺物

土層堆積状況 調査溝5は、現状の屋敷地南東側に設定した全長5.8m、幅1.6mの調査溝である。当初は東西方向に直線的に掘削を行ったが、遺構の検出状況に合わせ西端の一部を拡張した。

調査溝内の土層堆積状況は、灰色砂礫土の基盤層の上層にやや粘性のある暗灰色砂質土の堆積を確認した。この層は調査溝3や4においても確認しており、屋敷地南側の広い範囲で認められる。鎌倉時代以前の遺物を包含していることから、屋敷地造成以前の堆積層と考えられる。暗灰色砂質土の上層には暗黄褐色砂質土の堆積を確認したが、西側に対して東側の方が土層中の小円礫が多く認められた。

検出遺構 調査溝5からは2条の溝を検出した。SD13は調査溝西側から南側にかけて掘削されたL字形の溝である。溝の規模は西側で幅1m、深さ70cm、南側で幅80cm、深さ15cmである。溝は一部が調査区外となっているが、調査溝の中ほどでほぼ直角に屈曲しており、屈曲点には土坑状の掘り込みが認められた。溝の深さは西側と南側とで大きく異なっており、土坑状の掘り込みの周囲で意図的に土堤状に浅く掘り残したものと推定される。埋土中からは古墳時代の須恵器から江戸時代の陶磁器類など幅広い時期の遺物が出土した。溝の最上層からは瀬戸美濃産陶器の登窯5小

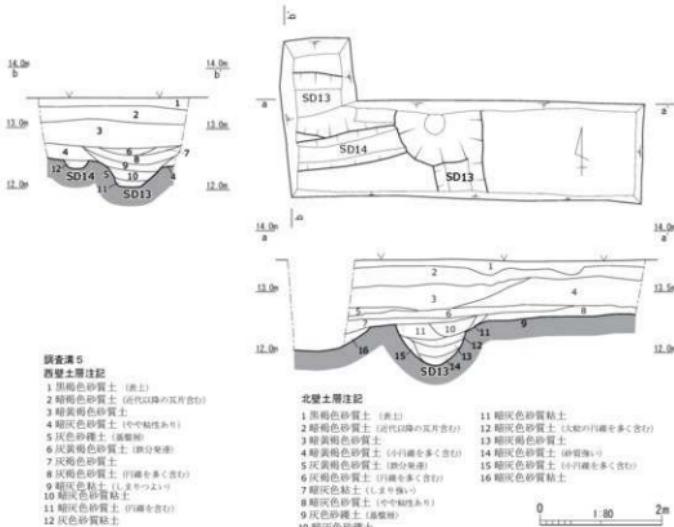


Fig.28 調査溝5実測図

期から7小期を中心とする遺物が出土しており、18世紀半ばまでには埋没したと考えられる。

SD14は調査溝西側から東西方向に掘削された溝である。東端はSD13と重複している。SD14は基盤層直上の暗灰色砂質土中から掘り込まれており、鎌倉時代以前の遺構と考えられる。

出土遺物 調査溝5からの出土品をFig.29に示した。41～51はSD13からの出土品、52～68は遺構外からの出土品である。

41は7世紀代の須恵器の坏身、42は13世紀代の山茶碗の底部である。43は内湾口縁の内耳鍤口縁部である。44は近世の肥前産の小壺である。45は美濃産の碗と思われる底部、46は美濃産の尾呂茶碗である。いずれも登窯6小期ないし7小期に位置づけられる遺物である。47は瀬戸産の片口で登窯5～7小期に、48は美濃産の片口で登窯7ないし8小期に位置づけられる。49は美濃産の鉄絵皿で、登窯7小期に位置づけられる。50は瀬戸産の半胴で登窯5ないし6小期、51は瀬戸産の擂鉢で登窯7小期に位置づけられる。

52と53は13世紀代の山茶碗底部である。54は瀬戸産の小碗の底部と考えられ、登窯5～7小期に位置づけられる。55は美濃産の灯明皿で登窯5小期、56は美濃産の小壺で17～18世紀に位置づけられる。57は志戸呂産の小壺で江戸時代の遺物である。58は美濃産の筒形香炉で、登窯6～7小期に位置づけられる。59は17世紀代の瀬戸産の擂鉢である。60は美濃産の片口で登窯8小期に位置づけられる。61～64は非ロクロ成形のかわらけである。65と66は内湾口縁内耳鍤の口縁部、67は半球形内耳鍤の口縁部である。68は砥石である。4面が使用され、台形型の断面形状になっている。

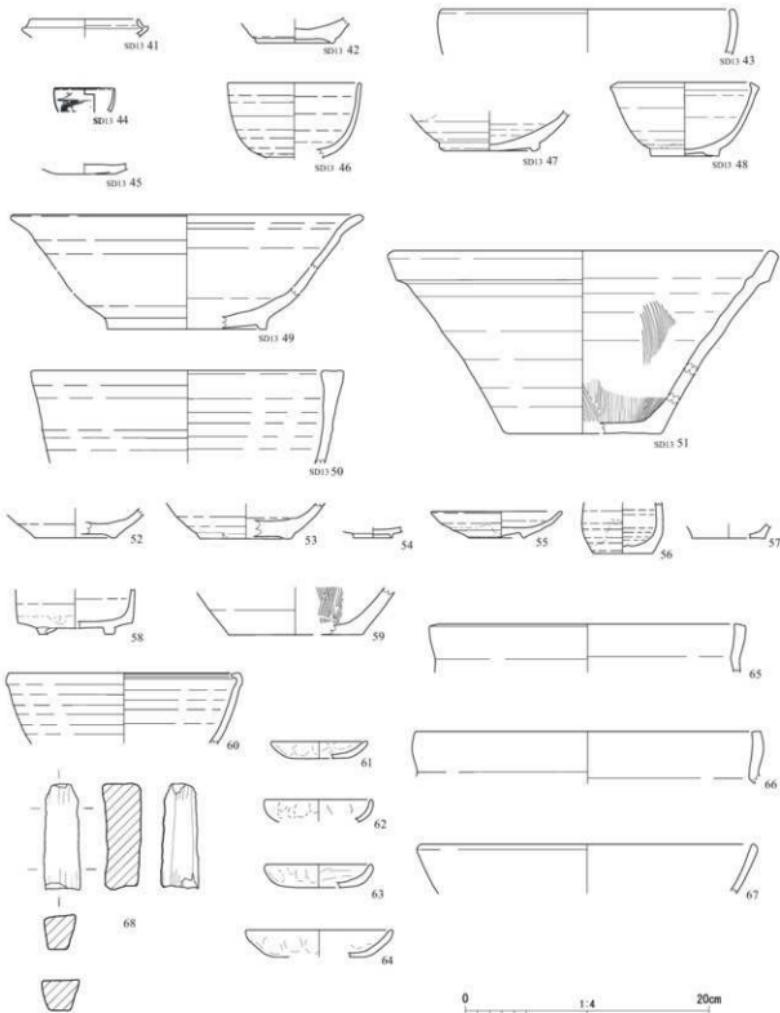


Fig.29 調査溝5出土遺物

(7) 調査溝6・7の遺構と遺物

土層堆積状況 調査溝6と7は、現状の屋敷地南側の水田内に設定した。屋敷門に至る通路を挟んで西側に調査溝6を、東側に調査溝7を設けた。

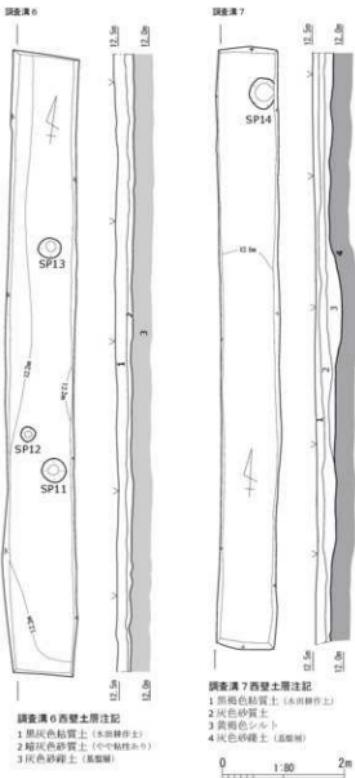


Fig.30 調査溝6・7実測図

た貿易陶磁など16世紀以前に遡るものも含まれており、現況の鈴木家屋敷の形成時期を示すものと考えられる。屋敷地外周の水田内は、水田耕作土の直下で基盤層となっていた。現状の屋敷内の地盤面と水田面とは1m程の高低差があり、現在水田となっている低地との高低差で屋敷の内外を区画していたと推定される。

また、1次調査と同様、屋敷地の地下には奈良時代から鎌倉時代の遺構や遺物が存在することが明らかになった。明確な建物跡等の検出には至っていないものの、鎌倉時代の貿易陶磁を含む優れた遺物が出土しており、鈴木氏の定住以前から、貿易陶磁を入手できる有力者層が近傍に存在したと推定される。

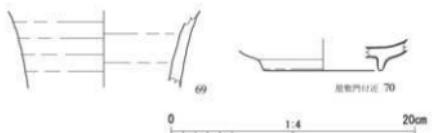


Fig.31 調査溝7出土遺物・表採遺物

調査溝内の土層堆積状況は、調査溝6と7で若干異なっており、調査溝6では基盤層である灰色砂礫土と表土である水田耕作土の間に暗灰色砂質土の堆積を確認したのに対し、調査溝7では、基盤層の直上で黄褐色シルトの堆積を確認した。

検出遺構 基盤層上面を精査したところ、調査溝6では3基の小穴を、調査溝7では1基の小穴を検出した。小穴は直径20~40cm程度であるが、いずれも掘削深度が浅く、建物の柱穴等の遺構とは認めがたかった。

出土遺物 調査溝6・7からの出土遺物は少なく、図示できたのは調査溝7から出土した1点のみであった。また、屋敷門付近で採集した遺物も合わせてFig.31に図示した。69は調査溝7から出土した9~10世紀代の灰釉陶器の壺頭部である。70は屋敷門付近で採集した江戸時代の肥前産の青磁皿である。

(8) 小結

2次調査の結果、屋敷地内の複数箇所で溝を検出した。特に屋敷地の南東側及び西側で確認した溝は、家相図に描かれた区画溝と位置や掘削方向が一致しており、1次調査で検出した区画溝と一連のものと考えられる。出土遺物は江戸時代のものが主体であるが、明代に焼成された

第3章 総括

今回の調査の結果、旧鈴木家屋敷跡の地下から、屋敷に関連する区画溝などの遺構や戦国時代から江戸時代にかけての遺物を多数検出した。また、想定外の古墳時代から鎌倉時代の遺構や遺物も確認し、鈴木氏の定住以前から同地に集落等が存在したことが明らかとなり、万斛西遺跡として埋蔵文化財包蔵地の新規登録に至った。発掘調査によって得られた結果をもとに鈴木家屋敷の姿について復元を行うとともに、中世から近世における鈴木家屋敷と万斛地区を取り巻く景観について考察を行い、総括としたい。

(1) 旧鈴木家屋敷跡の構造

旧鈴木家屋敷跡の敷地内には、母屋や土蔵など複数の建物が残存しているが、いずれも明治時代以降の建築であり、現状において江戸時代以前に建築された建物は残されていない。また、屋敷は度重なる火災に遭っており、江戸時代中期以前の記録を焼失している。

過去の鈴木家屋敷の様相を知る上で手がかりとなるのが、Fig.32 に示した鈴木家屋敷の家相図である。江戸時代後期に描かれたものと推定され、屋敷外周の距離や建物の配置、溝などが描かれている。

今回の発掘調査で、屋敷内の建物群を囲む溝を複数箇所で確認しており、この家相図に描かれた区画溝と考えられる。区画溝は屋敷内部の排水路としても機能していたと考えられ、末端は屋敷地南側の低地に至っている。

家相図中には「池」と表現された場所が複数認められ、貯水ないし導水施設に関わるものと推定される。今回の調査においても、溝の一部を土坑状に掘り溝めた箇所があり、関連を窺わせる。

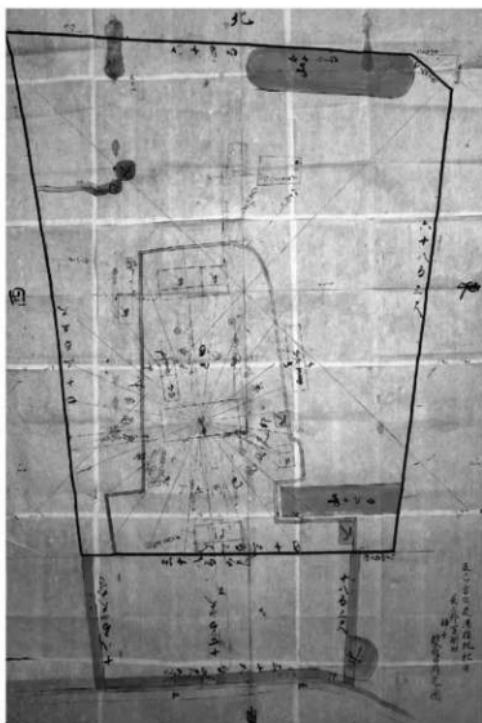


Fig. 32 鈴木家屋敷家相図

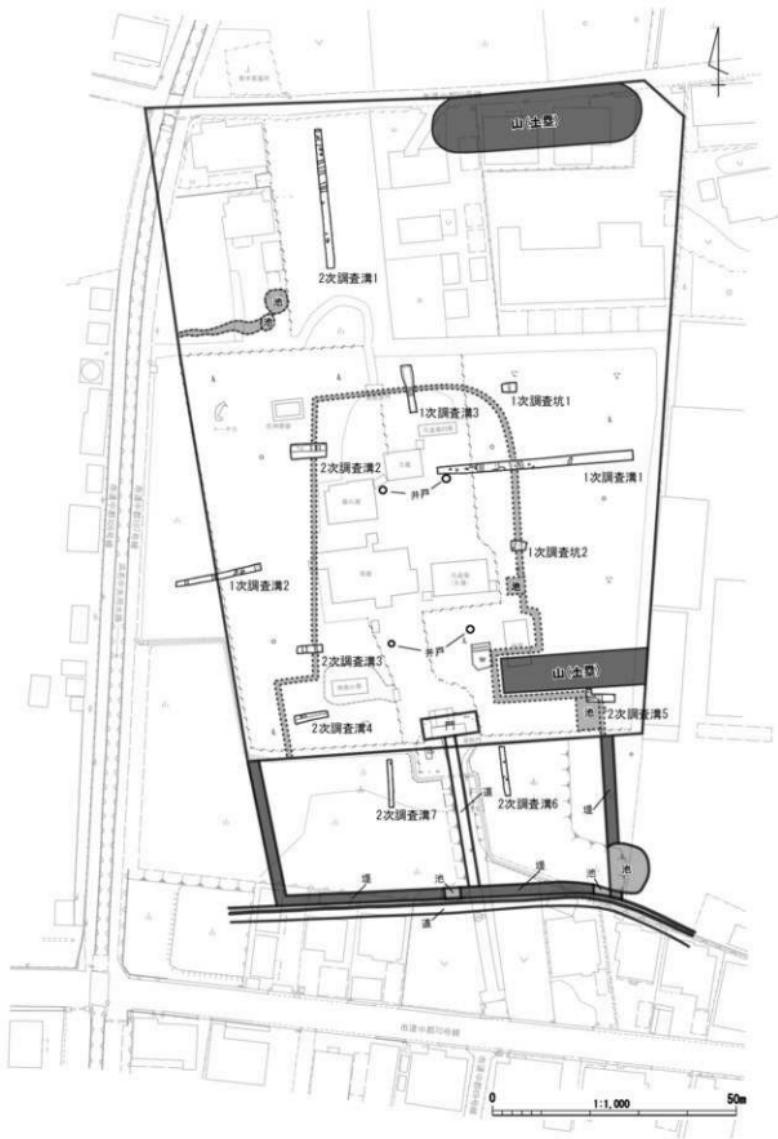


Fig. 33 鈴木家屋敷想定図

また、この家相図で注目すべき点として、「山」と表現された東西に細長い構造物が描かれている。屋敷の外周に設けられた土壘と推定されるが、既に削平を受けていると考えられ、現況から存在を確認することはできず、発掘調査でも痕跡は見出せなかった。

屋敷地の南側は低地となっており、現在は水田として利用されている。今回の調査の結果、水田耕作土の直下で基盤廻層を確認しており、堀状の掘り込みは確認できなかった。現状の屋敷地と水田面との間には1m程の高低差があることから、明確な堀等の構造物は設けず、低地との高低差で屋敷地の内外を区画していたと推定される。

今回の発掘調査結果と家相図に描かれた内容を照らし合わせると、鈴木家屋敷は方形の区画内に土壘を構築し、さらに母屋など中心的な建物の周囲を区画溝で囲っていたと推定される。屋敷の区画の形状は、当初は正方形を呈していたが、本家と新家に分離した際に敷地も分割され、家相図に描かれた形状になったと考えられる。屋敷内の区画溝は出土した遺物などから、16世紀後半代にその原型が形成されたと考えられる。溝の最上層には、18世紀後半代の遺物が多く認められるところから、この時期までには溝は埋没したと推定される。

(2) 中世から近世における万斛地区の景観

万斛西遺跡の東端には甘露寺が立地している。甘露寺は寺伝によると弘仁年間（810～824年）創建とされる万斛地区の古刹であり、かつては多数の塔頭を擁していたと伝えられる。度重なる火災により建物を焼失しており、現在の伽藍は明治時代の再建であるが、中門は焼失を免れて残存し、浜松市指定文化財となっている。

甘露寺から東へ500m程の一帯には万斛遺跡が広がっている。万斛遺跡の範囲内には中世の居館跡と想定される箇所があり、中世の土豪沢木氏の屋敷跡と推定されている。現在、屋敷跡の推定地は住宅地や畠地に変貌しているが、一部に堀跡と推定される構造物が残存しているほか、石塔の存在も確認できる。これまでに本格的な発掘調査は実施されていないが、遺跡内から耕作中に、多数の鎌倉時代の山茶碗が採集されている。戦国時代における沢木氏は、「沢木文書」の中で今川氏との密接な関係を読み取ることができる。遺跡の東側には、天竜川の支流の痕跡が認められ、川湊の存在が想定される。沢木氏と鈴木氏の屋敷は甘露寺を挟んで、東西に配置されており、川湊に至る街道筋を意識した立地と考えられる。

沢木氏の屋敷跡とされる万斛遺跡は、遺構や遺物に関する情報が十分には得られていないが、少なくとも文献上でその名が確認できるのは永禄年間までに留まり、江戸時代以降に屋敷が存続した形跡は認められない。徳川家康は永禄11年（1568年）に三河から遠江への進出を開始するが、今回の旧鈴木家屋敷跡の発掘調査で得られた遺物は、16世紀後半以降に数を増す傾向があり、前述の沢木氏の動向と合わせ、家康の遠江進出の時期と重なる。家康と鈴木氏の関係を直接的に示す資料は確認できないが、鷹狩りや側室の阿茶局にまつわる伝承は、家康に対する協力関係を類推させる。徳川家康の遠江進出後は、鈴木氏が沢木氏に代わり万斛地区における領民支配の中心的役割を果たしたと推定され、戦国時代における支配者層の交代と在地有力者層の盛衰とが、密接に関係しているものと考えられる。

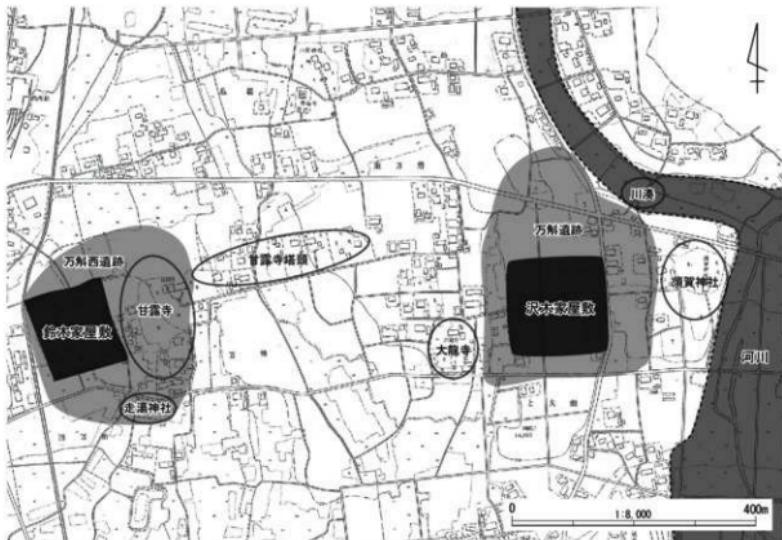


Fig.34 鈴木家屋敷と沢木家屋敷

(3) 今後の展望

一連の旧鈴木家屋敷跡の発掘調査を通じて、近世の庄屋屋敷の構造の一部が明らかになった。屋敷の敷地は最盛期には一辺が 130 m 余りにも及ぶ広大なものであり、独礼庄屋筆頭の鈴木氏の家格を示す規模と言える。また、出土品についても多数の瀬戸美濃産の施釉陶器を中心とした国産陶磁器類に加えて、明朝の貿易陶磁が含まれているなど、優れた出土品から当時の鈴木氏の財力を窺い知ることができる。

鈴木家屋敷は、度重なる火災により江戸時代中期以前の記録を焼失しているが、現存する土蔵内より江戸時代後期以降を中心とした、多数の古文書が発見されている。これらの古文書は調査の途上にあるが、鈴木氏及び万解地区の歴史的動向を探る上で、今後の調査の進展に期待したい。

今回の旧鈴木家屋敷跡の発掘調査は、浜松市内において中世後半から近世における庄屋屋敷跡を主体的に発掘調査した初めての事例となった。市内における近世の遺跡については、考古学的な調査が進んでおらず、城下町などを含め近世集落の実態解明が今後の課題と言える。

[謝辞]

本書の作成にあたり、瀬戸美濃産陶器に関して藤澤良祐氏から、常滑産陶器について中野晴久氏からご教示を得た。また、現地発掘調査に際して村木正弥氏はじめ旧鈴木家屋敷跡地活用協議会の皆様からご協力とご教示を賜った。末筆ながら記して謝意を示す次第である。

[参考文献]

- 大塚克美編 1983 『浜松の歴史』
- 藤澤良祐 2002 「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」『(財)瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第10輯
- 中世土器研究会 1995 『中世の土器・陶磁器』 真陽社
- 東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会 1996 『鍋と甕そのデザイン』
- 東海上器研究会 2000 『須恵器生産の出現と消滅』
- 東海上器研究会 2013 『渥美窯編年の再構築』
- 東海上器研究会 2015 『灰釉陶器生産における地方窯の成立と展開』
- 浜松史跡調査顕彰会 1976 『浜松の史跡』
- 愛知県 2007 『愛知県史 別編 窯業2 中世・近世 濱戸系』
- 愛知県 2012 『愛知県史 別編 窯業3 中世・近世 常滑系』
- 静岡県 1994 『静岡県史 資料編7 中世三』
- 浜松市教育委員会 2001 『海東遺跡／法ヶ崎遺跡』
- 浜松市教育委員会 2001 『浜松市遺跡調査集報』
- 浜松市教育委員会 2004 『有玉古窯』
- 浜松市教育委員会 2015 『浜松城跡10』
- 浜松市教育委員会 2014 『平成24年度 浜松市文化財調査報告』
- 浜松市教育委員会 2016 『平成26年度 浜松市文化財調査報告』
- (財)浜松市文化協会 1999 『西畠屋遺跡1999』
- (財)浜松市文化協会 2001 『東畠屋遺跡』
- (財)浜松市文化協会 2004 『坊ヶ跡遺跡』
- (財)浜松市文化振興財団 2005 『東若林遺跡』
- (財)浜松市文化振興財団 2009 『北神宮寺遺跡』
- 浜松市博物館 2001 『中世の都市と「ひくま」』
- 浜松市博物館 2008 『新説 図説浜松の歴史』
- 浜松市立積志公民館 1990 『わが町文化誌 積志の流れ今むかし』

出土遺物観察表

凡例

- ・遺物の残存率は%表示、10%単位での切り上げ
- ・「反」は反転して図化したもの
- ・大きさの単位はcm
- ・回転体以外の大きさ表示は、器径：長さ、器高：幅、口径：厚み
- ・色調は『標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議局監修）に準拠

Fg	調査次	調査区	番号	取上番号	遺物・部位	種別	残存率	反転	器径	器高	口径	色調	その他
0	1次	田園溝	1	257	S006	中世陶器	山形罐	10	一般反			灰白	130, 細切
6	1次	田園溝	2	257	S006	中世陶器	山形罐	10	反			灰白	130
6	1次	田園溝	3	267	S006	中世陶器	山形罐	20	反	12.0		灰白	
6	1次	田園溝	4	257	S006	中世陶器	かわらけ	20	反	11.2		青口クロ底削	
6	1次	田園溝	5	257	S006	中世陶器	かわらけ	30	反	10.7	2.4	灰白	青口クロ底削
6	1次	田園溝	6	257	S006	中世陶器	かわらけ	50	反	12.0		青口クロ底削	
4	1次	田園溝	7	257	S006	中世陶器	山形罐	30	反	12.0		灰白	山形罐、器底2
6	1次	田園溝	8	257	S006	近世陶器	錐鋸	10	反	32.0		灰白	錐鋸、山形罐、器底2
6	1次	田園溝	9	257	S006	近世陶器	瓶子	10	反			灰白	瓶子、山形罐、器底2
6	1次	田園溝	10	257	S006	近世陶器	瓶子	30	反			灰白	瓶子、山形罐、器底2
6	1次	田園溝	11	263	S006	近世陶器	瓶子	30	反			灰白	瓶子、山形罐、器底2
6	1次	田園溝	12	260	SP05	土師質土器	かわらけ	10	反	11.2		灰白	青口クロ底削
6	1次	田園溝	13	261	SP05	中世陶器	山形罐	5	反	16.2		灰白	130
6	1次	田園溝	14	245	S006	中世陶器	片口	5	反	9.4	8.9	灰白	70
6	1次	田園溝	15	270	S006	中世陶器	片口	5	反	9.4		灰白	70
6	1次	田園溝	16	228	S006	中世陶器	片口	10	反			灰白	70~80
6	1次	田園溝	17	228	S006	中世陶器	片口	10	反			灰白	70~80
6	1次	田園溝	18	245	S006	中世陶器	片口	10	反			灰白	70~80
6	1次	田園溝	19	231	S006	中世陶器	片口	10	反			灰白	70~80
6	1次	田園溝	20	269	S006	中世陶器	片口	5	反	15.0	4.7	灰白	70~80
6	1次	田園溝	21	269	S006	中世陶器	片口	5	反	13.0		灰白	70~80
6	1次	田園溝	22	228	S006	中世陶器	片口	5	反			灰白	70~80
6	1次	田園溝	23	231	S006	中世陶器	片口	5	反			灰白	70~80
6	1次	田園溝	24	228	S006	近世陶器	天日葵模	10	反	11.3		灰白	70~80
6	1次	田園溝	25	268	S006	近世陶器	天日葵模	10	反			灰白	70~80
6	1次	田園溝	26	270	S006	近世陶器	小瓶	10	反			灰白	70~80
6	1次	田園溝	27	269	S006	近世陶器	小瓶	5	反			灰白	70~80
6	1次	田園溝	28	228	S006	近世陶器	小瓶	10	反			灰白	70~80
6	1次	田園溝	29	271	S006	近世陶器	折縁模造壺	30	反			灰白	70~80
6	1次	田園溝	30	271	S006	近世陶器	折縁模造壺	40	反	7.0	5.3	白	70~80
6	1次	田園溝	31	269	S006	近世陶器	折縁模造壺	50	反	5.0	1.4	白	70~80
6	1次	田園溝	32	228	S006	近世陶器	片口皿	10	反			灰白	70~80
6	1次	田園溝	33	269	S006	近世陶器	片口皿	10	反			灰白	70~80
6	1次	田園溝	34	268	S006	近世陶器	片口皿	30	反			灰白	70~80
6	1次	田園溝	35	248	S006	近世陶器	片口皿	5	反			灰白	70~80
6	1次	田園溝	36	268	S006	近世陶器	片口皿	5	反			灰白	70~80
6	1次	田園溝	37	270	S006	近世陶器	片口皿	20	反			灰白	70~80
6	1次	田園溝	38	245	S006	近世陶器	片口皿	20	反			灰白	70~80
7	1次	田園溝	39	271	S006	近世陶器	片口皿	5	反	16.8		灰白	70~80
7	1次	田園溝	40	271	S006	近世陶器	片口皿	5	反	22.3		灰白	70~80
7	1次	田園溝	41	271	S006	近世陶器	片口皿	30	反	33.2	13.2	灰白	70~80
7	1次	田園溝	42	269	S006	近世陶器	錐鋸	5	反	35.5		灰白	70~80
7	1次	田園溝	43	248	S006	近世陶器	錐鋸	5	反	33.0		灰白	70~80
7	1次	田園溝	44	246	S006	近世陶器	錐鋸	10	反	31.6		灰白	70~80
7	1次	田園溝	45	270	S006	近世陶器	錐鋸	10	反			灰白	70~80
7	1次	田園溝	46	268	S006	近世陶器	錐鋸	5	反	24.4		灰白	70~80
7	1次	田園溝	47	269	S006	近世陶器	錐鋸	5	反	4.2		灰白	70~80
7	1次	田園溝	48	271	S006	近世陶器	錐鋸	100	反	4.7	1.5	灰白	70~80
7	1次	田園溝	49	227	S006	近世陶器	染付罐	10	反	13.0		灰白	70~80
7	1次	田園溝	50	270	S006	近世陶器	染付罐	10	反	10.6		灰白	70~80
7	1次	田園溝	51	269	S006	近世陶器	染付罐	10	反			灰白	70~80
7	1次	田園溝	52	248	S006	近世陶器	染付罐	10	反			灰白	70~80
7	1次	田園溝	53	244	S006	土師質土器	かわらけ	50	反	9.8	1.9	淡黄	70~80
7	1次	田園溝	54	248	S006	土師質土器	半圓形内耳瓶	5	反	23.0	23.0	淡黄	70~80
7	1次	田園溝	55	244	S006	土師質土器	半圓形内耳瓶	5	反			淡黄	70~80
10	1次	田園溝	56	239~247	S001	近世陶器	丸口	20	反	13.9	1.2	淡黄	70~80
10	1次	田園溝	57	232~247	S001	近世陶器	丸口	30	反	13.6	4.3	淡黄	70~80
10	1次	田園溝	58	232	S001	近世陶器	丸口	10	反	13.8		淡黄	70~80
10	1次	田園溝	59	239~248	S001	近世陶器	丸口	10	反	18.5		淡黄	70~80
10	1次	田園溝	60	245~254	S001	近世陶器	丸口	10	反	18.0		淡黄	70~80
10	1次	田園溝	61	232	S001	土師質	小型罐	10	反	36.0		淡黄	70~80
10	1次	田園溝	62	251	SP03	中世陶器	瓶子	10	反	11.8		淡黄	70~80
10	1次	田園溝	63	239	S006	中世陶器	瓶子	10	反			淡黄	70~80
10	1次	田園溝	64	239	S006	中世陶器	瓶子	10	反			淡黄	70~80
10	1次	田園溝	65	236	S006	中世陶器	瓶子	5	反	13.3		淡黄	70~80
10	1次	田園溝	66	243~253	S004	土師質土器	かわらけ	40	反	10.6	2.0	淡黄	70~80
12	1次	田園溝	67	243	S004	中世陶器	山形罐	20	反			青口	70~80
12	1次	田園溝	68	243	S004	中世陶器	山形罐	20	反			青口	70~80
12	1次	田園溝	69	254	S004	中世陶器	山形罐	20	反			青口	70~80
12	1次	田園溝	70	254	S005	中世陶器	山形罐	10	反			青口	70~80
12	1次	田園溝	71	254	S005	中世陶器	山形罐	10	反	15.1		青口	70~80
12	1次	田園溝	72	254	S005	中世陶器	山形罐	10	反	11.5		青口	70~80
12	1次	田園溝	73	242	S005	中世陶器	山形罐	10	反	16.5		青口	70~80
14	1次	田園溝	74	300	SD01	近世陶器	皿口	10	反			青口リープ	古瀬戸、後醍醐
14	1次	田園溝	75	300	SD01	近世陶器	皿口	10	反			青口	青口リープ
14	1次	田園溝	76	300	SD01	近世陶器	皿口	10	反			青口	青口リープ
14	1次	田園溝	77	300	SD01	近世陶器	皿口	10	反			青口	青口リープ
14	1次	田園溝	78	300	SD01	近世陶器	皿口	10	反			青口	青口リープ
14	1次	田園溝	79	382~384	SD02	近世陶器	錐鋸	10	反			青口	青口リープ
16	1次	田園溝	80	384	SD02	近世陶器	錐鋸	10	反	11.6		青口	青口リープ
16	1次	田園溝	81	384	SD02	近世陶器	錐鋸	10	反	21.9		青口	青口リープ

Fg	種別	測定地	番号	加算番号	基準番号	種別	種別番号	反応	反応	反応	反応	反応	色調	その他
16	1次	園芸試1	81	363	SD102	土師器土器	かわらけ	20	反	10.3			灰白	
16	1次	園芸試1	82	363	SD102	土師器土器	かわらけ	10	反	10.1			青口/クロ成形	
16	1次	園芸試1	83	364	SD102	土師器土器	内窓有蓋罐	20	反	24.8			浅黄	
16	1次	園芸試1	84	364	SD102	土師器土器	内窓有蓋罐	10	反				浅黄	
16	1次	園芸試1	85	364	SD102	土師器土器	内窓有蓋罐	20	反				灰	
16	1次	園芸試1	86	364	SD102	土師器土器	内窓有蓋罐	10	反				14.3 7C末~8C初半	
16	1次	園芸試1	87	363	SD102	土師器土器	内窓有蓋罐	20	反				7C~8C	
17	1次	園芸試1	88	363	SD102	土師器土器	内窓有蓋罐	10	反				灰白	
17	1次	園芸試1	89	362	包含番	近世陶器	蝶型青花	20	反	13.8	6.1		灰白	
17	1次	園芸試1	90	361	包含番	近世陶器	丸焼	20	反	10.3	6.4		灰白	
17	1次	園芸試1	91	361	包含番	近世陶器	丸焼	20	反	10.8			深黄	
17	1次	園芸試1	92	361	包含番	近世陶器	丸焼	20	反	9.5	6.5		灰白	
17	1次	園芸試1	93	361	包含番	近世陶器	丸焼	20	反				灰白	
17	1次	園芸試1	94	361	包含番	近世陶器	丸焼	20	反				深黄	
17	1次	園芸試1	95	362	包含番	近世陶器	丸焼	30	一體反				灰白	
17	1次	園芸試1	96	362	包含番	近世陶器	丸焼	30	反				灰白	
17	1次	園芸試1	97	362	包含番	近世陶器	丸焼	30	反	12.3			灰白	
17	1次	園芸試1	98	362	包含番	近世陶器	丸焼	30	反	22.3			深黄	
17	1次	園芸試1	99	362	包含番	近世陶器	丸焼	20	反				灰白	
17	1次	園芸試1	100	362	包含番	近世陶器	丸焼	20	反				深黄	
17	1次	園芸試1	101	362	包含番	近世陶器	丸焼	100	反	10.0	5.7		灰白	
17	1次	園芸試1	102	362	包含番	近世陶器	小杯	20	反	5.8	3.6		灰白	
17	1次	園芸試1	103	361	包含番	近世陶器	温?	20	反				灰白	
17	1次	園芸試1	104	361	包含番	近世陶器	温?	20	反	14.6	2.7		反対	
17	1次	園芸試1	105	362	包含番	近世陶器	温?	20	反				灰白	
17	1次	園芸試1	106	361	包含番	近世陶器	温?	10	反	20.0			温?	
17	1次	園芸試1	107	361	包含番	近世陶器	温?	10	反	23.1			温?	
17	1次	園芸試1	108	361	包含番	近世陶器	温?	10	反				温?	
17	1次	園芸試1	109	362	包含番	近世陶器	温?	10	反				温?	
17	1次	園芸試1	110	361	包含番	土師器土器	かわらけ	10	反	10.0			1.0 にじく/黄	
17	1次	園芸試1	111	361	包含番	土師器土器	かわらけ	10	反	9.8			青口/クロ成形	
17	1次	園芸試1	112	361	包含番	土師器土器	かわらけ	20	反	10.2			浅黄	
17	1次	園芸試1	113	361	包含番	土師器土器	かわらけ	20	反	9.7	2.0		青口/ロウ成形	
17	1次	園芸試1	114	361	包含番	土師器土器	かわらけ	40	反	9.6			浅黄	
17	1次	園芸試1	115	361	包含番	土師器土器	半圆形内耳鍋	-	反	26.1			青口/ロウ成形	
17	1次	園芸試1	116	361	包含番	土師器土器	石器	-	反				保付	
18	1次	園芸試1	117	361	包含番	土師器土器	石器	-	反	9.5			13C	
18	1次	園芸試1	118	361	包含番	土師器土器	瓶	10	反	37.5			青口/温?	
18	1次	園芸試1	119	361	包含番	近世陶器	錫錆	10	反	34.6			青口/温?	
18	1次	園芸試1	120	361	包含番	近世陶器	錫錆	20	反	34.0			青口/温?	
18	1次	園芸試1	121	362	包含番	近世陶器	錫錆	30	反	32.0			青口/温?	
18	1次	園芸試1	122	363	包含番	近世陶器	錫錆	10	反	36.0			温?	
18	1次	園芸試1	123	361	包含番	近世陶器	錫錆	10	反	31.1			温?	
18	1次	園芸試1	124	361/362	包含番	近世陶器	錫錆	10	反	38.0			13C	
21	2次	園芸清1	1	591	中世陶器	山口破	10	反	15.4			青口/温?		
21	2次	園芸清1	2	19	591	中世陶器	山口破	10	反	17.4			青口/温?	
21	2次	園芸清1	3	13	SD505	中世陶器	山口破	20	反	16.6	5.2	31.2	13C にじく/温?	
21	2次	園芸清1	4	13~42	SD505	中世陶器	山口破	20	反	38.0			13C 温?	
21	2次	園芸清1	5	14	SD505	中世陶器	山口破	10	反	31.1			13C 温?	
21	2次	園芸清1	6	9	包含番	反釉陶器	温?	10	反	38.0			13C 温?	
21	2次	園芸清1	7	2	包含番	中世陶器	温?	10	反	15.9			13C 温?	
21	2次	園芸清1	8	2	包含番	中世陶器	温?	10	反	16.0			13C 温?	
21	2次	園芸清1	9	3	包含番	中世陶器	温?	10	反	15.8			13C 温?	
21	2次	園芸清1	10	41	包含番	中世陶器	山口破	10	反				13C 温?	
21	2次	園芸清1	11	1	包含番	中世陶器	山口破	40	反				13C 温?	
21	2次	園芸清1	12	9	包含番	中世陶器	山口破	30	反				13C 温?	
21	2次	園芸清1	13	10	包含番	中世陶器	山口破	30	反				13C 温?	
21	2次	園芸清1	14	40	包含番	中世陶器	山口破	40	反				13C 温?	
21	2次	園芸清1	15	1	包含番	中世陶器	温?	10	反				13C 温?	
21	2次	園芸清1	16	2	包含番	中世陶器	温?	20	反				13C 温?	
21	2次	園芸清1	17	18	包含番	青白瓷	温?	20	反				13C 温?	
21	2次	園芸清1	18	2	包含番	土師器土器	かわらけ	20	反				13C 温?	
21	2次	園芸清1	19	2	包含番	近世陶器	鼎足	20	反				13C 温?	
21	2次	園芸清1	20	1	包含番	近世陶器	鼎足	30	反				13C 温?	
21	2次	園芸清1	21	21	包含番	近世陶器	鼎足	30	反				13C 温?	
21	2次	園芸清1	22	2	包含番	近世陶器	鼎足	20	反	5.4			13C 温?	
21	2次	園芸清1	23	2	包含番	近世陶器	小壺	10	反	41.5			13C 温?	
21	2次	園芸清1	24	47	SD102	中世陶器	大口盆	10	反	26.9			13C 温?	
21	2次	園芸清1	25	27	SD102	中世陶器	大口盆	20	反				13C 温?	
21	2次	園芸清1	26	16	SD102	中世陶器	大口盆	20	反				13C 温?	
21	2次	園芸清1	27	32	SD102	中世陶器	大口盆	30	反				13C 温?	
21	2次	園芸清1	28	37	SD102	中世陶器	大口盆	30	反				13C 温?	
21	2次	園芸清1	29	36	SD102	中世陶器	大口盆	30	反				13C 温?	
21	2次	園芸清1	30	16	SD102	中世陶器	青白瓷	10	反				13C 温?	
21	2次	園芸清1	31	5	SD102	中世陶器	青白瓷	10	反	27.9	24.5		13C 白	
21	2次	園芸清1	32	53	SD102	中世陶器	青白瓷	10	反				13C 白	
21	2次	園芸清1	33	30	SD102	土師器土器	内窓口内耳皿	10	反	24.8	24.2		13C 白	
21	2次	園芸清1	34	50	SD102	土師器土器	内窓口内耳皿	20	反	5.0			13C 白	
21	2次	園芸清1	35	40	SD102	土師器土器	内窓口内耳皿	40	反	11.0			13C 白	
21	2次	園芸清1	36	30	SD102	土師器土器	内窓口内耳皿	40	反				13C 白	
21	2次	園芸清1	37	49	SD102	近世陶器	片口	20	反				13C 白	
21	2次	園芸清1	38	15	SD102	近世陶器	片口	40	反	30.0			13C 白	
21	2次	園芸清1	39	51	SD102	近世陶器	片口	40	反	25.8			13C 白	
21	2次	園芸清1	40	61	SD102	近世陶器	片口	40	反	33.8			13C 白	
21	2次	園芸清1	41	51	SD102	近世陶器	片口	40	反	26.3	23.0		13C 白	
21	2次	園芸清1	42	51	SD102	近世陶器	片口	20	反	10.4	8.7		13C 白	
21	2次	園芸清1	43	50	SD102	近世陶器	片口	20	反	24.8	24.2		13C 白	
21	2次	園芸清1	44	30	SD102	中世陶器	小杯	40	反	5.0			13C 白	
21	2次	園芸清1	45	30	SD102	中世陶器	小杯	40	反				13C 白	
21	2次	園芸清1	46	30	SD102	中世陶器	小杯	40	反				13C 白	
21	2次	園芸清1	47	49	SD102	近世陶器	片口	20	反				13C 白	
21	2次	園芸清1	48	51	SD102	近世陶器	片口	40	反	12.2	6.0		13C 白	
21	2次	園芸清1	49	51	SD102	近世陶器	片口	40	反	29.0	9.4		13C 白	
21	2次	園芸清1	50	51	SD102	近世陶器	片口	40	反	26.0			13C 白	
21	2次	園芸清1	51	51	SD102	近世陶器	片口	40	反	32.0	15.0		13C 白	
21	2次	園芸清1	52	24	SD102	中世陶器	山口破	20	反				13C 白	
21	2次	園芸清1	53	50	SD102	中世陶器	山口破	20	反				13C 白	
21	2次	園芸清1	54	24	SD102	中世陶器	山口破	20	反				13C 白	
21	2次	園芸清1	55	24	SD102	中世陶器	山口破	20	反				13C 白	
21	2次	園芸清1	56	60	SD102	中世陶器	山口破	20	反				13C 白	
21	2次	園芸清1	57	29	SD102	中世陶器	山口破	20	反				13C 白	
21	2次	園芸清1	58	24	SD102	中世陶器	山口破	20	反				13C 白	
21	2次	園芸清1	59	50	SD102	中世陶器	山口破	20	反				13C 白	
21	2次	園芸清1	60	29	SD102	中世陶器	山口破	20	反				13C 白	
21	2次	園芸清1	61	27	SD102	中世陶器	山口破	20	反				13C 白	
21	2次	園芸清1	62	50	SD102	中世陶器	山口破	20	反				13C 白	
21	2次	園芸清1	63	29	SD102	中世陶器	山口破	20	反				13C 白	
21	2次	園芸清1	64	29	SD102	中世陶器	山口破	20	反				13C 白	
21	2次	園芸清1	65	24	SD102	中世陶器	山口破	20	反				13C 白	
21	2次	園芸清1	66	24	SD102	中世陶器	山口破	20	反				13C 白	</

報告書抄録

書名（ふりがな）		万斛西遺跡（まんごくにしいせき）								
編著者名		井口智博								
編集・発行機関		浜松市教育委員会（浜松市市民部文化財課が補助執行） 浜松市市民部文化財課（浜松市教育委員会の補助執行機関） 〒430-8652 浜松市中区元城町103-2 TEL (053) 457-2466 FAX (053) 457-2563								
発行年月日		2016年3月20日								
遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間		調査面積	調査原因	
		市町村	遺跡番号	2013年1月15日 ～1月23日 2013年3月5日 2014年10月30日 ～11月28日						
万斛西遺跡	静岡県浜松市東区中郡町	22132	2-01-42	34度46分24秒	137度46分26秒	227 m ²			公園整備	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項				
万斛西遺跡	集落跡	古墳時代 奈良時代 鎌倉時代 戦国時代 江戸時代	土坑溝小穴	土師器、須恵器 山茶碗 貿易陶磁 施釉陶器 土師質土器		戦国時代から江戸時代にかけての庄屋屋敷跡。遺物には貿易陶磁の優品が含まれる。				
要約	<p>万斛西遺跡は、江戸時代の庄屋屋敷である旧鈴木家屋敷跡の発掘調査を契機に新規発見された遺跡である。鈴木氏は、江戸時代に藩主に単独拝謁が許された、独礼庄屋の筆頭として活躍した家柄である。</p> <p>今回の調査により江戸時代の絵図に描かれた、屋敷の区画溝等の遺構を検出するとともに、戦国時代から江戸時代に屋敷内で用いられた土器が多数出土した。特に明朝の官窯産の貿易陶磁は、鈴木氏の家格を示す資料と言える。また、屋敷跡の下層からは鎌倉時代以前の遺構や遺物も確認しており、平野部における新たな遺跡の発見に至った。</p>									

万斛西遺跡

2016年3月20日

編集・発行機関 浜松市教育委員会
 （浜松市市民部文化財課が補助執行）
 印 刷 松本印刷株式会社

図 版

PLATE



1 1次調査 調査溝1 全景（北東から）



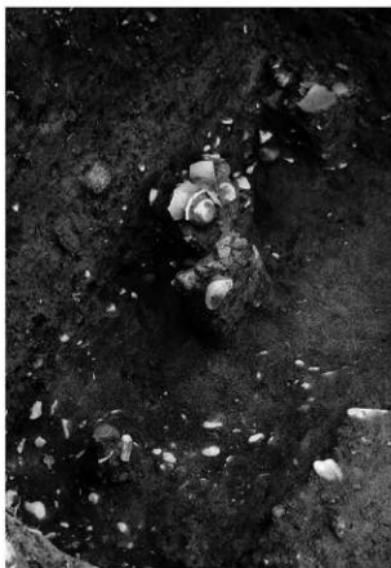
2 1次調査 調査溝1 小穴群（南西から）



3 1次調査 調査溝1 SD08 遺物出土状況（北東から）



1 1次調査 調査溝2 全景（東から）



2 1次調査 調査溝2 SD01 遺物出土状況（北西から）



3 1次調査 調査溝3 SD04 出土遺物状況（南西から）



2次調査 鈴木家母屋と発掘調査区全景（南西から）



1 2次調査 調査溝1 全景（北東から）



2 2次調査 調査溝1 SD03・04（北東から）



3 2次調査 調査溝1 SK01 遺物出土状況（南東から）



2次調査 調査溝2全景（南東から）



1 2次調査 調査溝3 全景（南東から）



2 2次調査 調査溝5 全景（南西から）



主要出土遗物



1次調査出土遺物（1）



1 次調査出土遺物（2）



1次調査出土遺物（3）

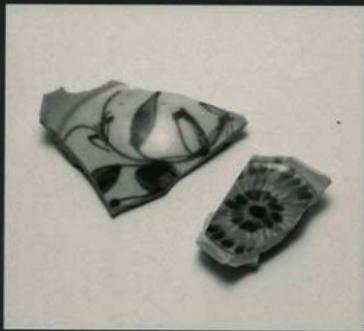


2次調査出土遺物

Mangokunishi Site

The 1st Excavation Report

A Report of Archaeological Investigations
In Western Shizuoka,Japan



March,2016

Hamamatsu Municipal Board of Education